

岡山健康科学

Okayama Health Science

Vol.4 2019

教育研究

総説

- 1 理学療法士養成教育における現状と課題
～本校におけるAO入試入学者の現状～ 横山暁大

- 13 理学療法士・作業療法士養成教育において実践力を育成する新たな教育
～パフォーマンス課題の活用した授業について～ 渡部悠司

教育研究

総説

理学療法士養成教育における現状と課題 ～本校におけるAO入試入学者の現状～

横山暁大¹⁾³⁾ 渡部悠司²⁾³⁾ 那須宣宏¹⁾ 野口泰子²⁾

1) 岡山医療技術専門学校 理学療法学科 2) 同 作業療法学科
3) 星槎大学 客員研究員

Key word : 理学療法士養成教育、新学習指導要領、AO入試

理学療法士養成は、大学・短期大学・専門学校と違った学校種の中で教育されており、各養成機関による課題も様々である。今後の教育方法を模索する中で、入学してくる学生の特徴を把握する事は重要である。理学療法士としてマッチングする人材を確保し、その学生に合った教育を行うことは急務である。今回、AO入試に着目し、今後における受験生の特徴を文部科学省が提示する学習指導要領を基に概観する。また、本校の10年間における学生の入学傾向を調査し、AO入試を中心に考察することで向き合うべき課題について述べる。

1. はじめに

最近、理学療法士養成において、十分な学力や目的意識のない学生が入学することが問題視されており¹⁾、筆者自身も本校に入学してくる学生の学力低下を痛感している。

その背景には、医療系専門学校の他にも大学において理学療法士を養成する学部・学科が増加していることも要因と考えられる。公益社団法人日本理学療法士協会（以下PT協会）によると、平成16年度には36校であったものが、平成29年度には105校に増加し²⁾、同じ理学療法士を目指す学生が大学と専門学校とに分散している。そのため、現役の高等学校卒業生は、学力が高い優秀な学生は大学を目指すことが多く、専門学校では2番手の学生が入学してきていることが多い。

理学療法士養成においては、基礎的な知識や経験の獲得、実習における知識や経験の多用な場面

での適応・活用のスキル獲得、併せてマニュアル等の読解や報告等の作成のスキル獲得も求められているが、現実には以下のような課題を抱えている。

基礎的な知識の確認においては、講義に対するテストが中心となるが、その内容は暗記力重視の講義やテストになっている。

臨床実習における経験や知識の多用な場面での適応・活用のスキル獲得においては、知識・理論系の成績が上位であるにも関わらず、臨床実習成績が低い学生、反対に知識・理論系の成績がそれ程上位ではないのにも関わらず、臨床実習成績が高い学生など、様々であり、学内の成績だけでは実習の成績をはかることができないのが現状である。臨床実習においては、見たことや聞いたことから得た情報を自らの持つ経験や知識を活用させていくスキルが求められるが、その場に応じた対

応ができないのは、知識の欠如に加えて状況の把握力、判断力、適応力等の欠如が非常に大きいと考える。

経済産業省は社会人基礎力の中で、3つの能力を構成しており、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」が職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎力として重要視している³⁾。理学療法士の仕事においては、修得した知識・技能をもとに対象者や環境（状況）を分析・評価し活用する力が求められる。つまり、養成校の入学においては、入学希望者の暗記力を測る試験は望ましくなく、むしろ知識・技能を活用し自ら考え判断し行動する力を測る必要がある。

最近、Admissions Office入試（以下AO入試）の是非が問われているが、AO入試は、本来、時間をかけて丁寧にその学生を評価していく入試、具体的には、暗記力を中心とした学力を求めるのではなく、さまざまな要素を見ていく入試の方法であり、その大学や専門学校のアドミッション・ポリシーに沿った能力を見ていく入試である。そのためか、学力検査を行わないことも多く、昨今の学力低下問題と相まってあまり好ましくない入試として位置付けられるようになってきている。

本校でも同様のことが問題視されてきたため、数年前より、AO入試に対しても学力試験を行うようになっている。

2. 日本の入学試験

文部科学省は、新たな大学入学者選抜への転換として、「点からプロセスへ」を掲げている⁴⁾。現在の各大学の入学者選抜（点での選抜）の特徴として、①ペーパーテスト中心であり、1点刻みによる学力検査への偏重、②アドミッション・ポリシーが抽象的で選抜方法と結びついていない、③AO入試等の一部における事実上の学力不問（一部には大学入学志願者に求められる基礎力・基本的な知識・技能及びこれらを活用する力につい

て把握、確認されていないなど、本来の趣旨とは異なる状況）、④入学方法の多様化・複雑化（大学側の業務の拡大、試験問題の作題の限界、入学後の教育への支障）、⑤全学的な実施体制の不備（アドミッション・オフィスを設けている大学でもAO入試等における事務的業務や広報活動など一部の業務の実施にとどまり、入試業務における統括的な枠割を果たしていないところも多い）ことを示している。

今後の各大学の入試選抜（プロセスとしての選抜）として、①入学志願者の多様な背景と主体性を重視（高校時代の多様な経験や活動歴、主体的に学ぶ力、大学での学修に対する意欲等を適切に評価）、②アドミッション・ポリシーの明確化による選抜方法の明示（入学志願者の多様で主体的な活動経験・学習経験を評価、討論や発表、記述・論述的問題、小論文、面接、実験、実技等で多面的に評価、「到達度テスト」において各大学が入学志願者に求める水準を明示）、③各大学の大学入学者選抜方法と「到達度テスト」の連携（「到達度テスト（発展レベル）（仮称）」は、知識・技能の活用力の評価を中心とし、各大学の入学者選抜方法はそれを前提にアドミッション・ポリシーに示す多様性・主体性に基づく総合力を評価するよう工夫）、④アドミッション・オフィスの整備等による全学的な実施体制の構築（アドミッションオフィサー等の専門スタッフを配置するとともに、アドミッション・ポリシーの具体化、選抜方法の開発、結果の分析等を一体的に行うなど、大学全体の入学選抜者の中核的な役割を果たす）ことなどが改革の第一歩とされている。よって、一般入試・推薦入試・AO入試の区分を見直し、入学者全体に対して、多面的・総合的に評価する総合型選抜へ根本的に改革していくことが重要視されてきており、今後の入試形態は変わりつつあると考える。

3. AO入試とは

佐々木は、大学入学者選抜をめぐる政策の転換について、80年代後半から90年代にかけて大学の入学者選抜制度は、高等学校教育課程の「弾力化」とともに、大学入学者選抜のあり方をめぐる政策の転換によっても規定されたとしている⁵⁾。文部科学省中央教育審議会答申（以下、「中教審答申」と略す。）（1985）では、二十一世紀に向けて社会の変化に対応できるようとくに必要とされる資質、能力は、創造性や自ら考え、表現し、行動する力であるとし、記憶力中心の詰め込み教育という傾向が強かったことを示したうえで、80年代の高い入試圧に対応するために、「人間を多面的に評価し、選抜方法や基準の多様化、多元化を図る」方向に大学入試者選抜方法を改革することを提唱している。

中教審答申では、高校教育改革として、①量的拡大から質的充実へ、②形式的平等から実質的平等へ、③偏差値偏重から個性尊重・人間性重視へ、を改革の基本的視点において、従来の学科区分を見直し、総合学科等の新しい区分の高校設置を推奨し、高校の多様化を図った⁶⁾。また、佐々木も述べているように、教育内容・方法にかかる改革、既に開始されていたとも言える「教育課程の弾力化」の一層の促進である。さらに、大学入試選抜方法の改善についても述べられており、「評価尺度の多元化・複数化」が図られたとしている。

中教審は、その改革の方向性として、①できるだけヴァリエティに富んだ個性や才能を発掘、選抜するため、点数絶対主義にとらわれない多面的な評価方法を開発する、②少数の有力大学を頂点として大学全体が序列化されるのではなく、多くの大学が、教育・研究において、特色を発揮し、競い合い、他選択型競争を促す構造、すなわち他峰型のシステムになる方向を目指す、③入試に関する情報を広く公開することを示している⁷⁾。よって、評価尺度の多元化・複数化として、①調査書、

面接、小論文、実技検査などを加味し、学力検査のみ偏しないように配慮する、②全教科の総合評価によるのではなく、秀でた特定教科や特定分野に重点を置く、③部活動・生徒会活動・資格取得・社会的活動その他を参考にする方法、④海外帰国生徒、社会人、職業高校卒業生を対象として、一般の志願者と異なる方法により選抜する方法、⑤できるだけ出身高校が広範囲に分散するように入学させる方法等が提唱されている。こういったことから、共通第一次学力試験が廃止され、1教科でも利用可能な大学入試センター試験が設置された。この流れが、少数科目入試の方向へと進んでいき、90年代の「AO入試」導入に繋がっていくことになる。

AO入試は、中教審第二次答申において「受験生の資質を多面的かつ丁寧に見るための選抜方法」として位置付けられている⁸⁾。AO入試は明確な定義はなく、具体的な内容に関しては各校のアドミッション・ポリシーに応じた学生を選抜する方法として行われている。そのため、学力試験を行わない学校も多く、一部の学生の学力低下にAO入試が関わっているのではないかという懸念もあり、多くの研究報告がなされている。それを受けて、文部科学省は、2020年度より国公私立大に学力評価を義務付ける方針を打ち出しており⁹⁾、大学入試センター試験や、大学独自のテスト、小論文などを課すよう方針を立てている。文部科学省によると、AO入試とは、「アドミッション・オフィスなる機関が行う入試というよりは、学力検査に偏ることなく、詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接等を組み合わせることによって、受験生の能力・適性や学習に対する意欲、目的意識等を総合的に判断しようとするきめ細かな選択方法の一つ」として受け止められている。また、受験時の学力に過度に依存することなく、受験生の能力・適性等を多面的かつ丁寧に判定することを目的とするものである。

4. AO入試の現状と課題

日本におけるAO入試は1990年慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）の導入が始まりとされている。山岸によると、2000年度には全国で72校、2001年度は207校、2002年度は285校でAO入試が実施されており、国公立大学では2000年度、4大学（東北大学、筑波大学、九州大学、岩手県立大学）で開催されたとしている¹⁰⁾。大作は、AO入試はそれから増え続けており、2007年には国立大学でAO入試を採用した学校は35校に増え、2006年度入試での入学者は2,098名に達しているとしている¹¹⁾。池田らは、2009年度入試で、国立大学43校、公立大学22校、私立大学458校がAO入試を実施しており、国立大学の5割、私立大学の7割以上がこの入試方法を実施していることを報告している¹²⁾。

大作らは、2005年度にアドミッションセンターの教員が参加して、全選抜方法において入学した学生のGPA（Grade Point Average）による成績評価を実施したところ、AO入試入学生の大学における成績は、全8学部とも比較的上位に位置することがわかったとし、AO入試入学生の学力は他の選択方法による学生の成績よりも劣ることはないことを報告している¹³⁾。よって、AO入試そのものが悪いのではなく、学力不足の受験者が合格している背景には、AO入試の中味の改善が必要であることを示唆している。

長谷川らは、入試区分ごとにみた平均学力はAO入学者が各学年ともに低く、入学時点での学業成績は、特に下位層で、円滑な学生生活を送れるのか危惧されるとしている。しかし、1年次の学力不振による留年者の割合は、低い数値となっており、学年進行に伴い成績の伸びを示す学生が多いこと、3学年全体の中で成績トップはAO入学生であり、また進級要件に満たない学生数も最小であることを報告している¹⁴⁾。さらに、AO入試入学生は、受験生にとって満足度が高く、クラブ活

動等への参加や活躍する学生も多いとし、入学時点では学力は低いものの、学年が進行するにつれて向上心の高さが成果に結びついたとしている。

池田らは、GPAでは学生の「質」の部分の把握することはできないとしながらも、AO入試入学生は一般入試入学生、推薦入試入学生に比べてGPAが低かったと報告している¹²⁾。

また、中室らは、AO入試入学生と一般入試入学生を比べて、リーダーシップの発揮や、満足度、目的意識、SFCへの帰属意識、精神面の健康状態についてアンケート調査を行っており、AO入試入学生はリーダーシップを発揮し、何かしらの課題や目標とともに、SFCに帰属意識を持ちつつ大学生生活を送っていることを報告している¹⁵⁾。

中西は、大学での成績と入試形態には強い関連はないとしつつも、国立大学における推薦・AO入試入学生の傾向としてはマイナスの影響があり、推薦・AO入試は「成績優秀な学生」を獲得できていないとしている¹⁶⁾。

坪井は、AO入試の受験者像を以下のようにまとめている¹⁷⁾。機械に関心がある、性格において優れている（明るさ、積極性、協調性、忍耐力、集中力、責任感、視野が広い）、理科が好きである、ものづくりが好きである、高校での授業を通して、ものづくり、電気、エネルギー、金属、環境などに興味をもった、部活で活躍した、さまざまな資格を取得した、勉学に励んだ、工業資源学部の働きかけ（大学説明会、出前講義）で興味をもった、生徒会で活躍した、高校の授業で学んだ地球・環境問題に関心がある、ボランティア活動で活躍したなどである。こういった特徴から、AO入試入学生は高校生活において積極的な学生生活を送っている印象があり、大学生生活でも積極的な活動ができる可能性を秘めた学生であることが伺える。専門学校におけるAO入試入学生に関しての文献的な検証はされていないが、大学におけるAO入試入学生に比べて学力的な面で劣っている

可能性はあるものの、同じような傾向がみられるのではないかと考えることができる。

5. AO学生と他選抜学生の差異

林らは、大学生に対するアンケート調査において、「AO学生は入学時には他の入学区分と比べ特異な層の学生であるが、卒業時には入学時ほど特異性が見られなくなること、満足度に関しては入学区分の差はなく、満足度が高い学生は資質・能力が大学で養われ、卒業時に保有する資質・能力が高く、大学時代にさまざまな活動に取り組んだ学生であること、そしてAO学生が他の入学区分と比べ、大学時代にさまざまな活動に取り組んだ傾向にあることが明らかになった。」としている¹⁸⁾。そのなかで、入学時学生自身が保有すると考える、社会が求める資質・能力として、「社会性」、「持続力」、「探求心」、「協調性」、「積極性・バイタリティー」が上位5項目であったと報告している。また、卒業時には、「社会性」、「協調性」、「倫理観」の順で割合が多い。AO学生の入学時の特性として、「積極性・バイタリティー」、「リーダーシップ」、「プレゼンテーション能力」が他の区分よりも優れていると報告している。AO学生の卒業時における項目で、他の入学区分よりも優位に差がみられたものは、「倫理観」、「探求心」、「積極性・バイタリティー」、「論理的思考」、「集中力」、「リーダーシップ」、「プレゼンテーション能力」、であったと報告している。また、「TOEIC以外の資格取得のための学習」、「ボランティア活動」、「インターンシップ」、「地域自治活動・地域団体での活動」、「留学生チューター等受け入れにかかわる活動」等で、AO学生が相対的に高いと報告している。AO入試がもつ選抜の性格上、学力を問われず入学してきたというイメージから、資質・能力が劣る学生層といったマイナス評価が強いが、卒業時にAO学生の資質・能力が他の入学区分に劣るといった結果は見られなかった。

社会人に求められる力とは何かを調査した結果、調査機関によって多少の違いがあるものの、社会性に関する内容、特にコミュニケーション能力や主体性に関するものが多い。また、問題解決能力など、知識を持っているだけでなくそれを使ってどう解決するのかといったことも重要視される傾向にある。あからさまに学力とは書かれていないが、学力があるうえで、これらの能力が必要であるといった内容と考えることができ、学力を問わないといったことではなさそうである。

6. 医療系養成校が抱える問題

トライアルファネット調べによると、平成28年度の全国高校卒業生数1,043,555人のうち、大学進学者数は514,984人、短大進学者数52,683人、専門学校に進学したのは170,103人であり、専門学校の進学に関しては、大学に次ぐ進学率となっており、短大よりも進学者数は多いとされている¹⁹⁾。専門学校の中でも、医療系専門学校の学生数は一番多く他業種に比べて非常に多い。医療系の専門学校では、カリキュラムを修了することで、国家試験受験資格を得られるものが多く、理学療法士に関しても同じことが言える。また、医療職養成に関しては、大学、短大によっても同じように養成する学部があるために、大学受験に失敗した学生が専門学校を受験する傾向が強くなってきている。PT協会によると、理学療法士養成校の学校総数は263校であり、定員13,976名（平成29年9月25日現在）となっている²⁾。そのうち、大学105校、短期大学6校、4年制専門学校及び大学校67校、3年制専門学校85校となっている。よって、受験者数の人口減少と大学全入時代の煽りを受けていることも影響しており、学力的な問題は否めない。また、以前は少なかった高等学校専門学科（商業科・工業科・農業科等；以下「専門高校」と称す）の学生の入学も増えてきている。また、大学・短大卒業後の再入学や、社会人入学生が増加してきて

いるのも事実である。

近年、大学をはじめとした高等教育機関において学生の学力低下について多くの提言がなされている。今まで、大学教育と一線を介してきた医療系専門学校であるが、大学全入時代に入り、同じような時代の煽りを受けていることは間違いない。また、専門職業人の養成に力を入れてきたが、最近では同じ医療系職種を養成する大学も増えてきており、大学以上に厳しい状況であるのは間違いない。学力に関して、平上は、入学を希望する学生の基礎学力は年々低下傾向にあることに加え、入学定員増による門徒拡大と少子化による養成校入学希望者の減少という背景が影響し、入学適性規準を満たさない学生を容認する環境ができつつあるとしている²⁰⁾。また、橋本らは、「日本語プレースメントテスト」を用い、新入生の日本語の語彙力を測定している。その結果、中学生レベルの語彙力しかない新入生が増加傾向にあることを報告している²¹⁾。さらに、橋本らは、平均的な「語彙力」は高校1年生レベルであったことを含め、高校3年生程度は約34%、中学生レベルが約25%、中学1年生レベルが6%含まれていたとしており、学生の語彙力には大きな開きがあることを報告している²²⁾。特に医療系で重要とされている情意領域に関して、片岡らは、学生の目的意識・学習意欲の低下、学力低下などを指摘し、能動的に自己研鑽する能力の低下を指摘している²³⁾。また、入学時から、挨拶ができない、敬語が使えない、規則や指示を理解できない、厳守できない、自らの考えや思いを口頭もしくは文章にてうまく表現できない、主体性を持って学ぶことが難しいなどの問題が見られているとしている。潮見は、自らの明確な意思に基づく目標を持ち合わせていない者や、資質面が問題視されている者も少なくないとしている²⁴⁾。さらに、杉浦は、「総じて、依然と比べて学習意欲が乏しく、学業成績が不良で、臨床実習においても目標を達成できない学生が増加し

ている」「患者と基本的なコミュニケーションが取れない」「指導しても改善されない」と報告している²⁵⁾。

7. 理学療法士養成における課題

理学療法士に必要な資質として、内山は、①高い自律性と倫理観、②社会のニーズを察して要請に応える態度、③社会が必要とする新たな情報や解決方法の創造と実践の3つが重要な要素としており、専門職として理学療法士に必要な能力は、良き思考者 (good thinker) であり、良質な実践能力が求められるとしている²⁶⁾。

これらのなかでも、理学療法士が患者の治療や訓練に携わることから、主体性をもって診療に関わり、専門的観点から患者の問題解決をはかる創造性や臨床的思考力がより重要となる。公益社団法人日本理学療法士協会は、養成教育に必要な視点として、理学療法教育のなかで思考過程の学修が必要であることを指摘している²⁷⁾。また、理学療法士養成校を卒業した人を対象としたアンケート調査では養成課程において臨床推論やクリニカルリーディングなどの課題解決力、思考力の育成強化を指摘している。このように、理学療法士に求められる資質として課題解決力や思考力は欠かせない資質といえる。これらのことから、入学試験において、先述した社会人として求められる課題発見力や創造力、理学療法士として必要な課題解決力や思考力を測ることは、入学後の学生の潜在能力をより適格に且つ、効率良く育成するためにも必要となる。

公益社団法人日本理学療法士協会の教育ガイドラインにおいて10項目の資質が理学療法士には必要とされている²⁸⁾。それは、①観察力：ありのままの現象をとらえる力、②思考力：起こっている現象の原因や現象同士の関係性を見抜く力、③探求心：興味と希望を持って思考を展開していく力、その道を極める力、④創造力：新しいことを生み

出していく力、⑤想像力：次に起こることや結果を予め思い浮かべることができる力、⑥共感力：相手の気持ちを察し、理解する力、⑦協調性：コミュニケーション力、⑧行動力：自ら行動する力、⑨機動力：状況に応じて臨機応変に行動を起こすことができる力、⑩自立：1人の人間として節度と責任を持つ力と定義されている。しかしながら、これらの能力を専門学校の間に身に付けることは至難の業となっているのが現状と言える。

8. 次期学習指導要領の改訂と入試の課題

文部科学省は、2020年4月（小学校）～2022年4月（高等学校）に導入を予定している次期学習指導要領のなかで、「課題を見いだし解決する力」、「知識・技能の更新のための生涯にわたる学習」、「他者や社会、自然や環境と共に生きること」など変化に対応するための資質・能力を、「生きる力」を踏襲する形で、新たに育成すべき学力として掲げている²⁹⁾。

学力観に関しては、1940年代後半における経験主義的学力観、1960年代の系統主義的学力観、1970年代の科学主義的学力観を経て、1977～1978年の学習指導要領の改訂において、各教科等の目標や学習内容を中核的事項にしぼり、学習負担の適正化を図るゆとりのある充実した学校生活の実現が図られ、いわゆる「ゆとり教育」がはじまった。しかし、1990年代に分数ができない大学生の存在などをきっかけに日本における学力低下の論争が展開された。また、経済協力開発機構（OECD）が実施する2003年の国際学習到達度調査（PISA：Programme for International Student Assessment）での順位が急落が学力低下論争に拍車をかけ、「ゆとり教育」からの脱却が模索された。

そして、2003年の学習指導要領の一部改訂のなかで、「生きる力」とともに知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意識や自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的な判断し、行動し、よ

りよく問題を解決する資質や能力等まで含む「確かな学力」が提唱され学習指導要領のなかに「最低基準」が明確化された。2005年中教審答では、「21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる『知識基盤型社会』（knowledge-based society）の時代である。」と示されている。この「知識基盤型社会」と言われる社会構造の変化の中で、基礎的・基本的な知識・技能の習得やそれらを活用して課題を見出し、解決するための思考力・判断力・表現力等、いわゆる「生きる力」の育成に基盤を置いた教育体制に変化している。

このように、時代背景をふまえた学力観は変化しており、次期学習指導要領の改訂においてもこれまでの「生きる力」を踏襲した応用的な学力を基盤とする学力観が規定されている。

文部科学省は、学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指している³⁰⁾。そのなかで、「主体的・対話的で深い学び」においては、各教科等において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を發揮させたりして学習の対象となる物事を捉え思考することにより、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方が鍛えられていく事を留意し、各教科等の得意に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学習の過程を重視した学習の充実を図ることとしている。

また、キャリア教育においては、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を

要としつつ各教科等の特質に応じた内容の充実を図るとしている。さらに、目指す資質・能力として、①知識及び技能の習得、②思考力、判断力、表現力等の育成、③学びに向かう力、人間性等が示されている。このように、新学習指導要領において、共通した学力観として、身に付けた知識及び技能の活用や思考力、判断力、表現力といったものが判断力、表現力の根底になっている。

したがって、今後の入試においては、このような国の政策動向を踏まえた入試の在り方を検討することが求められる。

9. 本校の入試の現状

理学療法士を養成している医療系専門学校の入学状況については、大学を含む養成校の増加により入学者数の確保が喫緊の課題とされている。また、3年制の専門学校・短期大学が主であった時代から、4年制専門学校・大学校・大学と教育体制にも様々な形態がみられており、社会情勢の要望から、養成機関は20年前100校弱であったものが、現在全国に262校と大幅に増加している。そういった養成機関の増加と学生数減少により、入学生の確保は非常に難しいものとなっている。また、入学してくる学生の状況も変化してきており、今

までは普通科高等学校を卒業して入学してくる学生がほとんどであったが、最近では専門高校の入学生も半数近くに増えてきている。

本校は、3年制の専門学校であり、定員は80名となっている。入試形態は、一般入試、指定校推薦入試、推薦入試、AO入試等、様々な入試形態をとっている。その中で、過去10年間の入学者の調査を行った。指定校推薦入試、推薦入試に関しては、10年前と比較しても大きな変化は見られず、入学者数は横ばいであった。一般入試は大きな変化は見られなかったが、若干減少傾向にある。それに対して、平成20年には23名であったAO入試入学生は、年度によって多少変化はあるものの、年を追うごとにその比率が増えており、平成29年度入学生においては45名と約半数の入学生がAO入試での入学生となっている。

以下に、過去10年の本校における入学生に対する専門高校出身者の割合とAO入試入学生に対する専門高校出身者割合、一般入試入学生に対する専門高校出身者割合を示す(表1)。表にもみられるように入学者に対する専門高校出身者の割合は半数近くを占めるようになってきている。また、専門高校出身者のAO入試入学生に対する割合は、半数近くから多い時には7割近い数値を示してい

表1 専門高校出身者割合

【単位%】

	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29
入学者	40.7	33.3	44.6	38.6	49.2	34.4	59.3	38.7	50.0	45.9
AO入試	52.2	42.9	50.0	48.7	55.9	45.2	67.9	48.4	57.1	48.9
一般入試	25.0	23.1	33.3	14.3	28.6	15.1	50.0	23.1	46.2	16.7

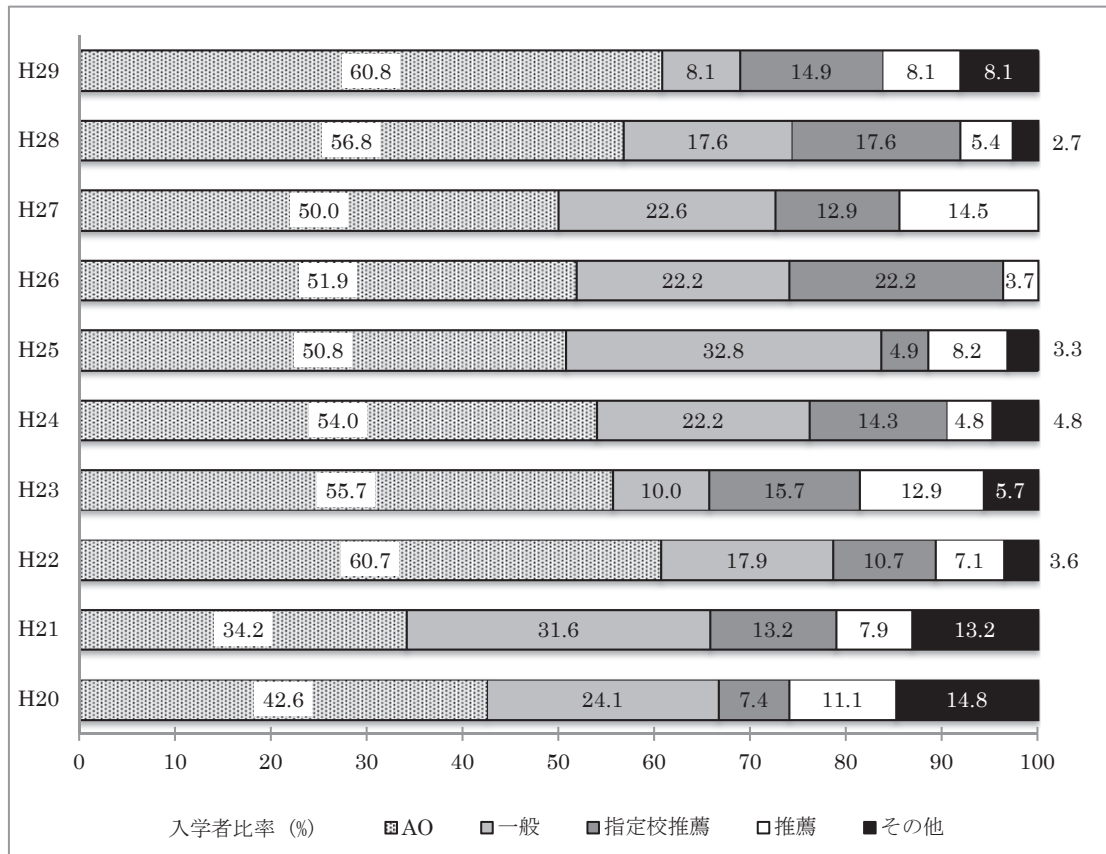


図1 入学者比率

る。反対に、一般入試に関しては、専門高校出身者は低い割合となっている。さらに、(図1)は、入試別入学者数の比率を示したものであるがAO入試によって入学してくる学生の割合が非常に多くなっているのがわかる。これは、普通科高等学校に比べ、専門高校は進路の決定が早期であることもあり、早期に行われるAO入試の実施時期と合致することも原因と考えられる。今後、本校に関しては、入学生の把握を十分に行うためには、AO入試の方法について検討していく必要性があるものと考えられる。

10. まとめ

以上述べてきたように、文部科学省も今までの高大接続における入試に関して、知識の基盤が必要であることは主張しつつ、基礎力・基本的な知識・技能及びこれらを活用する力についての把握

などを重要視したものがようになってきていることを示しており、入試の方法を模索している。さらには、文部科学省が進めてきている「生きる力」の育成、次期学習指導要領の改訂を踏まえることも必要となる。

特に、AO入試は、入試対策のみを行ってきた学生ではなく、問題解決能力など、知識を持っているだけでなくそれを使ってどう解決するのかといった能力や、ヴァリエティに富んだ個性や才能を発掘、選抜するための入試であり、それぞれの高等教育機関の特色に応じた学生を選抜するためのものである。さらに、学校内でどのような生活を送ってきたのか、充実した学校生活を送ってきたのかなどは、高等教育機関に入ってから非常に重要な要素と考えることができる。

本校でも、AO入試を行っているが、最近、専門高校の学生が多く応募してきている。よって、

今までと同じような、暗記力重視の試験では本来の学生の力を把握することはできないことが予測される。また、AO入試を採用している高等教育機関は現在でも非常に多くなっており、受験生も少なくなないことを考えると、各高等教育機関が必要とする能力を明確にした、入試のデザインが急務であると言える。

【引用文献】

- 1) 菅沼一男, 平林茂, 大日向浩, 金子千春: 理学療法科学学生の大学生活における不安-大学生活不安尺度による検討-. 理学療法科学. 30 (2). 193-196, 2015
- 2) 公益社団法人日本理学療法士協会: 養成校一覧. <http://www.japanpt.or.jp/general/aim/training/>. (閲覧日2017年12月9日)
- 3) 経済産業省: 社会人基礎力. <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>. (閲覧日2019年2月22日)
- 4) 文部科学省: 新たな大学入学者選抜への転換～点からプロセスへ～. 資料1-1. 高大接続特別部会 (19回) 配布資料, 2014.
- 5) 佐々木隆生: 私立大学一般入試形態の戦後史-入試の多様化と少数科目入試の展開の軌跡. 年報公共政策学. Vol.11. 19-5, 2017.
- 6) 文部科学省中央教育審議会: 臨時教育審議会答申, 1985. http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318297.htm. (閲覧日2017年8月27日)
- 7) 文部科学省中央教育審議会: 新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について, 1991. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/910401.htm. (2017年8月27日閲覧)
- 8) 文部科学省中央教育審議会: 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について. (中央教育審議会第二次答申), 1997. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309655.htm (閲覧日2018年1月8日)
- 9) 文部科学省: 各大学における入学者選抜の改善, 2017. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315961.htm. (閲覧日2017年8月22日)
- 10) 山岸みどり: 北海道大学 AO入試の現況. 物理教育. 第50巻. 第5号. 309-312, 2002.
- 11) 大作勝: 国立大学のAO入試は学生の学力低下につながるか. リメディアル教育研究. 第3巻. 第2号. 54-59, 2008.
- 12) 池田太臣, 伊藤実歩子, 山田尚子, 佐伯勇: 甲南女子大学におけるAO入試に関する現状と課題. 甲南女子大学研究紀要. 第47号. 107-111, 2011.
- 13) 大作勝, 南部広孝: 長崎大学のAO入試5年間を総括する. 大学入試研究ジャーナル. No.17. 33-38, 2007.
- 14) 長谷川明, 桃井龍慈, 佐藤正毅, 鈴木寛: 進路支援型AO入試と入学後の学力検査. 八戸工業大学紀要. 第24巻. 1-7, 2005.
- 15) 中室牧子, 藤原夏希, 井口俊太郎: 「AO入試」の再評価 慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス (SFC) を事例に. Keio SFC journal. Vol.14. No.1. 178-197, 2014.
- 16) 中西啓喜: 国立大学は推薦・AO入試によって「成績優秀な学生」を獲得できているのか? -エリートセクターにおけるマス選抜の導入-. 高等教育ジャーナル: 高等教育と生涯教育. 24. 63-74, 2017.
- 17) 坪井ひろみ: AO入試実施状況に関する報告. 秋田大学資源学部研究報告. 第27号. 31-34, 2006.
- 18) 林寛子, 富永倫彦: 卒業時に保有する資質・能力と満足度みるAO学生と他選抜学生の差異. 大学教育. 第5号. 47-58, 2008.
- 19) トライアルファネット. 専門学校の基礎知識～現状偏～<https://www.tryalpha.net/contents/2017/04/28/%E5%B0%82%E9%96%80%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E3%81%AE%E7%8F%BE%E7%8A%B6%E3%81%AF%EF%BC%9F%E3%80%80%E3%80%90%E5%9F%BA%E7%A4%8E%E7%9F%A5%E8%AD%98%E3%80%91/>. (閲覧日2017年12月9日)
- 20) 平上二九三: 吉備国際大学の新たな理学療法士教育の展開. 吉備国際大学保健科学部紀要. 第19号. 25-31, 2009.
- 21) 橋本美香, 山口恒夫, 下田健治, 大高正憲: 川崎医療短期大学における「日本語プレースメントテスト」の実施結果. 川崎医療短期大学紀要. 28号. 19-25, 2008.
- 22) 橋本美香, 山口恒夫, 兵藤文則: 川崎医療短期大学における「日本語プレースメントテスト」の実施結果 (第2報). 川崎医療短期大学紀要. 29号. 1-5, 2009.
- 23) 片岡紳一郎, 阿曾絵巳, 中野禎, 中俣恵美: 理学療法士教育における情意領域に対する教育的アプローチ. 関西福祉科学大学紀要. 第14号. 187-201, 2010.
- 24) 潮見泰蔵: 理学療法モデルの提案: 教育目標. 理学療法. 22. (3). 553-559, 2005.
- 25) 杉浦昌巳: 大量養成時代に求められる教育-養成施設の教員としての立場から-. PTジャーナル. 43 (1). 19-20, 2009.
- 26) 内山靖: 理学療法学序説 内山靖 (編). 標準理学療法学 専門分野-理学療法学概説. 2-30. 医学書院. 2014

- 27) 公益社団法人日本理学療法士協会：第2回理学療法士・作業療法士学校養成施設カリキュラム等改善検討会資料2. 平成29年9月6日. <http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000176542.pdf#search=%27%E6%97%A5%E6%9C%AC%E7%90%86%E5%AD%A6%E7%99%82%E6%B3%95%E5%A3%AB%E5%8D%94%E4%BC%9A+%E6%80%9D%E8%80%83%E9%81%8E%E7%A8%8B%27> (閲覧日2018年1月12日)
- 28) 内山靖：教育ガイドライン. 日本理学療法士協会, 13, 2008.
- 29) 文部科学省：学習指導要領「生きる力」, 2017.http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm (閲覧日2017年12月6日)
- 30) 文部科学省：小学校学習指導要領解説 総則編. 平成29年6月. 6-101, 2017.

理学療法士・作業療法士養成教育において 実践力を育成する新たな教育 ～パフォーマンス課題を活用した授業について～

渡部悠司¹⁾³⁾ 十河正樹¹⁾ 野口泰子¹⁾ 那須宣宏²⁾
横山暁大²⁾³⁾ 濱本泰子²⁾ 増川武利²⁾

1) 岡山医療技術専門学校 作業療法学科 2) 同 理学療法学科
3) 星槎大学 客員研究員

Key word : パフォーマンス課題、ルーブリック、実践力

1. はじめに

文部科学省は、自己の従事する職業における専門性の高度化とともに、複雑・困難な課題に対応できる実践力の強化を求められる状況にあるとし、新たな教育システムや方法の必要性を提言し、今後の職業教育では、座学や理論の教育のみにとどまらず、産業界等と連携して、専門分野における高度で実践的な専門性を身につける工夫された教育の仕組みが必要と提言している¹⁾。つまり、現代の職業教育においては、いかに高度で実用性の高い実践力を学習者に身につけさせるかが重要となる。

近年、学校教育の中で学習者の実践力を高める新たな教育方法としてパフォーマンス課題が注目されている。パフォーマンス課題とは、複数の知識やスキルを総合して使いこなすことを求める複雑な課題で、具体的にはレポートやプレゼンテーションなどまとまった作品や実演を求める課題である²⁾。

日本でパフォーマンス課題が注目された背景には、世界的な教育政策の動向として断片化された知識や技能ではなく、人間の全体的な能力をコン

ピテンシーとして定義し、それをもとに教育目標を設定する考えが広まったことにある³⁾。そして、経済協力開発機構（OECD）が行う国際的な学習到達度調査である PISA（Programme for International Student Assessment）においても、言語や知識、技術を相互作用的に活用する能力や思慮深く考える力などの応用的な学力が調査対象となっている³⁾。このような世界的潮流のなか、日本でも育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標や内容が検討され応用的な学力を育成する手段としてパフォーマンス課題の導入が進められた。そして、平成29年3月（小学校・中学校）および平成30年3月（高等学校）に実施された学習指導要領の改訂では、知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」を実現し、子どもたちが未来の創り手となるために求められる資質・能力を育んでいくために、「何ができるようになるか」、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」を明確にすることが求められ、パフォーマンス課題を用いた社会で通用する応用的な学力の育成が推奨されている⁴⁾。したがって、高等教育においてパフォーマンス課題を活用した教育を展開する

ことは、学生が初等および中等教育で培った学習経験を活かし、応用的かつ実用的な学力を育成できる可能性がある。

そこで本稿では、理学療法士および作業療法士養成教育においてパフォーマンス課題を活用した実践力を育成する新たな授業の可能性について論じる。

2. パフォーマンス課題の理論的背景と特徴

パフォーマンス課題は、構成主義的学習観に基づいている。構成主義的学習観とは新たに学んだ知識がそれまでの知識構造を変質させながら、学習が進行するという学習観である⁵⁾。構成主義的学習観においては、共同体の中で学習が行われ、対象や他者との相互作用を通じて、学習者自身が知識を構築し、置かれている状況の中で知識を活用することに意味があるとされる⁶⁾。そのため、パフォーマンス課題は実社会で直面するようなりアリティのある課題内容であることが求められる。また、パフォーマンス課題は、ただ単にレポートなどの課題を設定すればよいというだけでなく、学習で得た知識を既存知識や技能と上手く組み合

わせ、状況に応じた活用を求める課題内容であることも重要となる(図1)。そして、授業内外の学習を通して、もっとも身につけさせたい能力を明確にし、学習者が身につけた能力を使いこなせるかどうか判断できる課題内容でなければならない。

3. パフォーマンス課題を活用した授業例

パフォーマンス課題を活用した授業は、初等および中等教育を中心に様々な教科で報告されている。そのなかで、パフォーマンス課題は、思考力や判断力、表現力、学習動機などに作用するとされている(表1)。いずれの報告においてもパフォーマンス課題を導入するだけでなく、学習者に修得させたい能力や技術を明確に定め授業を計画し活用していることが特徴である。

医療系専門職の養成教育においては、看護師養成教育でいくつかの実践報告が散見され、アセスメント技能や思考力の修得を目的とした授業で系統的に用いられている。また、パフォーマンス課題を活用し、臨床現場で求められる実務能力の修得を目指した授業が展開されている。医療系専門職の養成教育における授業実践研究では、パ

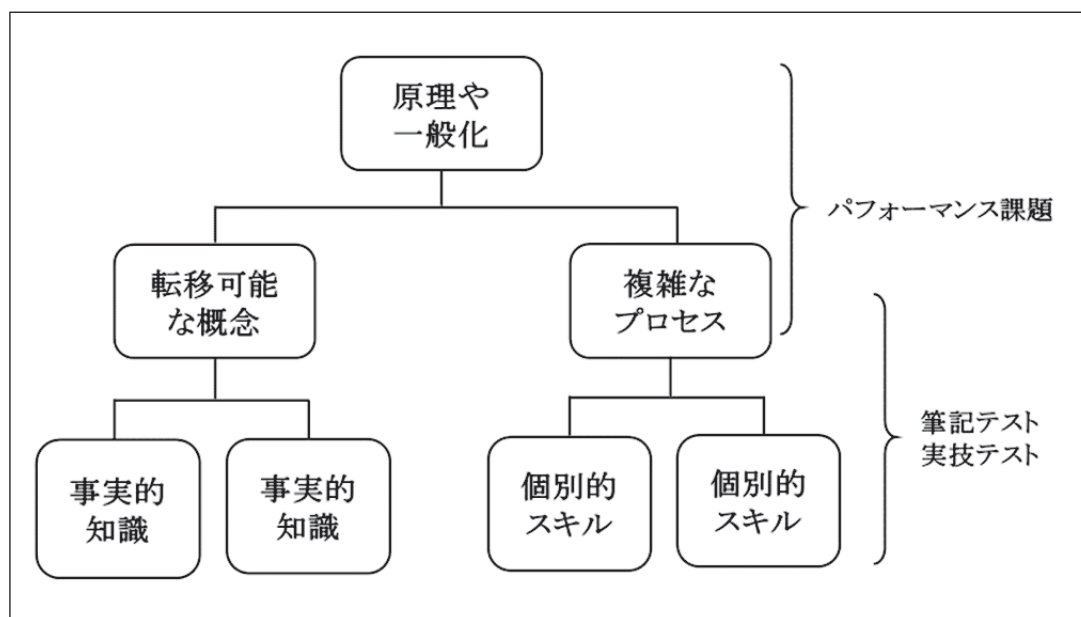


図1 「知の構造」と評価方法の対応²⁾ (一部改変)

表1 パフォーマンス課題を活用した授業研究

著者	論文名	対象	科目	パフォーマンス課題がもたらす作用
武藤明日香 ⁷⁾	話す能力を高める国語科の授業の開発：パフォーマンス課題を活用した逆向き設計の授業づくりから	小学校1年生 小学校4年生	国語科	パフォーマンス課題を提示することで、児童が常にパフォーマンス課題を意識して学習を進めることができる。また、児童が単元の学習の見通しを持つことができ、自ら思考し、学習を工夫したり、一足先の学習に主体的に取りくむ。
宮田佳緒里ら ⁸⁾	学習課題と評価課題の機能を併せ持つパフォーマンス課題を組み込んだ単元設計とその効果—中学校社会科「日本の諸地域」の学習を題材として—	中学校2年生	社会科	知識・技能の習得のみならず、概念の抽象化や事例の豊富化までをねらう学習を展開できる可能性がある。
荒尾真一ら ⁹⁾	パフォーマンス課題を利用した授業改善（I）—中学校理科「電流と磁界の単元において試行—	中学校3年生	理科	学習の中で基本的な知識の定着は必要だが、パフォーマンス課題に取り組ませることで応用力の育成ができる可能性がある。
大方祐輔ら ¹⁰⁾	知識基盤社会における理科の役割（2）—パフォーマンス課題を取り入れた授業実践—	中学校1年生 高校2年生	理科 生物	パフォーマンス課題が、科学的な思考・判断・表現の評価に有効である。
田中容子 ¹¹⁾	高等学校におけるパフォーマンス評価の実践	高校1～3生	英語科	学習によって生じる気づきの中で肯定的動機（学ぶ行為への動機）が生まれ学習を主体的なものにする。
杉田泰一 ¹²⁾	地学基礎「地球の形と大きさ」における学びを深める単元構成	高校2年生	地学基礎	パフォーマンス課題を取り入れた探究活動を設定し、単元全体の学習内容と学習方法を構成することが、事象を科学的に探究するために必要な資質・能力の育成に有効である。
草野純子ら ¹³⁾	パフォーマンス評価の考えを導入したフィジカルアセスメント授業取組の検討	大学2年生	総合演習（フィジカルアセスメント）	パフォーマンス課題を行うことで、学生が経験を経て1つ1つの知識や技術の間をつなげるスキルを得られる。また、思考過程を深めることができる。
宮野公恵 ¹⁴⁾	高齢者看護学 応用看護論演習にパフォーマンス課題を導入した試みと成果	大学4年生	高齢看護学	パフォーマンス課題によって学生の思考・判断を促すことができる。また、パフォーマンス課題を通じて、パターン化された行動ではなく、実際の臨床に即した行動を修得する機会を得られる。

表2 パフォーマンス課題の例

数学 (中学1年) ¹⁵⁾	アメリカから留学生のJohn君が転校してきました。John君は、世界中にメール友達がいるそうです。あなたはJohn君と一緒にいろいろな国の友達とチャットで話してみたいのですが、それぞれの国が今、何時なのか分かりません。いろいろな国が今、何時なのか、経度をもとに調べる方法を考えてみましょう。
生物 (高校2年) ¹⁰⁾	物体落下時に、魚類の逃避運動はどのような過程で生じているのか。
高齢看護学 (大学4年生) ¹⁴⁾	誤嚥性肺炎で入院している認知症高齢者に内服薬（抗生剤）を与薬して下さい。本人の訴えに応じて転倒のリスクも考えながら、トイレまで杖歩行を介助して下さい。
看護学 (専門学校1年生) ¹⁶⁾	あなたは、看護専門学校の1年生担任です。「看護学への招待」の授業で「どのようにナイチンゲールの看護を実現するか？」について90分の授業をすることになりました。初めての実習でも、看護の視点でできる範囲のケアを実践できるよう、授業で使う資料をA3用紙1枚で作成してください。(一部抜粋)

パフォーマンス課題を用いることで、授業では得られにくい臨場感をえてより実践的な学習環境を作り出そうという意図がうかがえる。

4. パフォーマンス課題作成の基本的な手続きおよび作成上の留意点

先述したように、パフォーマンス課題の内容は、学習者にとって身近でリアリティある課題内容で、思考を刺激し知識や技術を活用するものである。例えば、高齢者の在宅生活支援について学んだ学習者には、「来週、おこなわれる訪問調査の際に住宅環境を評価するよう頼まれました。カルテ情報と担当ケアマネージャーの情報から、これまでの経過や生活状況を把握し、住宅環境の評価計画を作成してください。」という文脈的な課題が示される(表2)。パフォーマンス課題を作成する際には、GRASPSという考え方が指針となる。GRASPSとはGoal、Role、Audience、Situation、Product、Standardsの略である¹⁷⁾(表3)。この6

つの要素を手がかりにパフォーマンス課題を作成することで質を高めることができる。このようにパフォーマンス課題は、目標をもとに戦略的に設計された課題であり、学習によって修得した能力の実用性を担保するものである。

5. パフォーマンス課題に対する評価方法

学習者が取り組んだパフォーマンス課題の成果を評価する代表的な手段がルーブリックである。ルーブリックとは、目標に準拠した評価のための基準づくりの方法論であり、学習者が何を学習するのかを示す評価規準^{注1)}と学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準^{注1)}をマトリクス形式で示す評価指標である¹⁸⁾(表4)。ルーブリックのマトリクスの中身は、評価規準の項目ごとに評価基準を担保する具体的かつ文脈化された評価観点が示される。ルーブリックでは、被評価者と評価者の双方に評価規準と評価基準をあらかじめ提示し評価の観点を可視化することから、パフォー

表3 GRASPS¹⁷⁾

<p>ゴール (Goal)</p> <p>あなたの課題は、_____です。</p> <p>ゴールは、_____することです。</p> <p>問題や難題は、_____です。</p> <p>克服すべき障害は、_____です。</p> <p>役割 (Role)</p> <p>あなたは、_____です。</p> <p>あなたは、_____するように頼まれました。</p> <p>あなたの仕事は、_____です。</p> <p>相手 (Audience)</p> <p>あなたの依頼人は、_____です。</p> <p>対象となる相手は、_____です。</p> <p>あなたは、_____です。</p> <p>状況 (Situation)</p> <p>あなたがいる文脈は、_____です。</p> <p>この挑戦は、_____と取り組むことに関わっています。</p> <p>完成作品、実演と意図 (Product, Performance, and Purpose)</p> <p>あなたは、_____するために、_____を創作します。</p> <p>あなたは、_____となるように、_____を開発しなくてはなりません。</p> <p>成功を評価するスタンダードと基準 (Standards and Criteria for Success)</p> <p>あなたの実演は、_____である必要があります。</p> <p>あなたの作業は、_____によって判断されます。</p> <p>あなたの完成作品は、次のスタンダードを満たさなくてはなりません。</p> <p>_____</p> <p>*すべての要素を含める必要はない。</p>
--

表4 ルーブリックの例¹⁸⁾ (一部抜粋)

	声	目線・態度	visual aids
A (5)	相手にわかりやすいように間や抑揚に気を付けながら、はっきりと大きな声で発表している。	相手と目線を合わせながら発表している。 (堂々としている)	話に合わせてタイミングよく、また効果的に写真やジェスチャーを使っている。
B (3)	部分的に間や抑揚に気を付けたりと、ところどころ聞こえない声で発表したりしている。	原稿にところどころ目を落としながら発表している。 (3回まで)	話に合わせて写真やジェスチャーを使っているが、タイミングがずれていたり、情報が少ない。
C (1)	聞き取りにくく、間や抑揚に工夫がない。	相手を見ず、原稿を見ながら発表している。	写真やジェスチャーを話に合わせて活用していない。

マンス課題の評価に有効であり、評価者ごとのズレの発生を抑制し、被評価者への答案やレポートのフィードバックを促進しやすいという特性がある¹⁹⁾。

6. ルーブリック作成の基本的な手続きおよび作成上の留意点

ルーブリックの作成では、まず、到達目標に対して達成度を測るための評価規準となるコンピテンシーや評価指標を抽出する。例えば、プレゼンテーションに対するルーブリックでは、表情、声、資料の構成などが評価指標としてあげられる。次に、抽出した評価指標がどの程度できているかを示す評価基準を設定する。初期の評価基準の設定では、あまり複数の段階を設定せず、理想的・標準的・要改善の3段階で設定する。そして、各評価規準で学習者がどのような達成度（何ができていればよいか）であれば理想的であるか、またどのような達成度（何ができていないか）であれば改善が必要であるかを文脈的に設定する。その後、標準的な達成度（何ができていて、何ができていないのか）を設定する。評価規準の達成度を示す評価観点の記述においては、できるだけ短文で記

述する。評価観点を考案する際には、「理想的とは〇〇ができる」、「理想的とは〇〇の条件がそろっている」を念頭に記述語を練る。

これらをもとに、ルーブリックの素案を作成し、複数の評価者と改善点を検討し修正を重ねる。そして、作成したルーブリックを使って複数の評価者で試験的にパフォーマンス課題の評価を行いさらに改善点を検討し完成させる。

筆者らは、ルーブリックの作成経験から、評価規準や評価観点を詳細に定めすぎることによって弊害を生む可能性を感じている。なぜなら、ルーブリックが学習者と評価者の双方に可視化することを前提にしているためである。評価規準や評価観点を詳細に定めすぎることによって、学習者の発想や思考の自由度を狭小化しかねない。評価規準や評価観点が可視化されることで、学習者と評価者で共通した到達目標を構築できる一方、学習者が定められた範囲でしか、発想や思考ができなくなる可能性がある。そのため、ルーブリックの作成と運用においては、他の評価者と十分な検討を行い、自由な学習活動を阻害しない適度な指標を作成する必要がある。

7. パフォーマンス課題を活用した授業展開における留意点

パフォーマンス課題を取り入れた授業を設計するためには、教科や単元授業終了後に学習者が何ができるようになることが目的なのかを明確に設定することから始める。そして、それができるようになるためには、どのような知識や技能を修得する必要があるかを分析し、その結果をもとに授業を計画する。つまり、授業終了後の学習者をイメージし、授業で教授する内容や課題を設定することが重要となる。

授業計画をもとに授業を展開する際には、学習者にも授業終了後の到達目標を具体的に示しそれを担保する課題としてパフォーマンス課題を提示する。授業では、知識の修得に執着することなく、新たな知識や技能を修得し、その活用方法を見出す応用力を育成することを意識する。また、知識の教示に加えて、その活用方法についても教授し、可能な限り臨床現場での一場面を取り入れた授業を系統的に展開することで、学習者の社会的通用性を高める。

パフォーマンス課題を取り入れた授業は、授業実施までの計画や準備に時間を要するものの、複数の教員の協力のもと一度作成すれば、PDCAサイクルに基づいて実践・改善を重ねることにより、パフォーマンス課題そのものの成長が図られる。さらには、このアプローチを他のテーマ・内容へと拡大することにより、カリキュラムレベルで、知識伝授型の授業から脱却し、授業と社会をつなぐ有用な方法になりえると考えている。

8. パフォーマンス課題を用いた授業における学生の反応からみる工夫

筆者らは、これまで、3年制作業療法士養成校（A専門学校）で専門科目においてパフォーマンス課題を用いた授業に取り組んでいる。パフォーマンス課題を用いた授業に対して学生からは、「作成

を通して大事なことを覚えることができた」、「実習で役立てられる」、「作品を作成するのが難しかった」、「作品の作成に時間を要し大変だった」などの意見を得た。学生らは、パフォーマンス課題が課されることに対して負担感を感じるものの、課題に取り組むことで得られるメリットも同時に感じていた。学生の負担感を軽減し、最大限にパフォーマンス課題を活用するためには臨床現場で活躍する理学療法士・作業療法士が作成した作品を提示するなど学習活動に期待感や臨場感を持たせる工夫も必要と考えている。また、筆者らは、これまでの授業経験から、学習者にパフォーマンス課題を取り組ませる際には、グループ学習にて課題に対する戦略を話し合う場を設けることが効果的であると感じている。Yagerらも、個人学習とグループ学習を比較しグループ学習の方が課題の正確性が高かったと報告している¹⁸⁾。教授者は話し合いの場面を観察しながら、学習者がそれまでの授業をどのように理解しているのか、パフォーマンス課題に対する戦略は適切かどうかを見定め、その後の授業や指導に活かす。そうすることで、学習者の授業に対する理解度のばらつきを補うことができクラス全体として学習効果を得やすい。

9. まとめ

近年の学校教育では、教育効果のアウトカムの一つとして、学習者が「何ができるようになったか」が注目されており、学習後の実益性を求める傾向にある。このアウトカムを教育上で担保する一手段がパフォーマンス課題やルーブリックである。理学療法士および作業療法士の養成教育では、すでに客観的臨床能力試験（OSCE：Objective Structured Clinical Examination）など学習者のパフォーマンスを求める課題が導入されており、馴染みやすい仕組みであると考えられる。しかし、パフォーマンス課題を取り入れた授業について、授業の設計から実施、評価・改善まで一貫して展開

されている事例はまだ少ない。パフォーマンス課題やルーブリックを取り入れた教育を展開することは、これまで以上に学生の臨床能力を効果的に育成できる可能性が高い。理学療法士および作業療法士の養成教育においては、各種の評価法やADL指導、補装具の作成、症例検討などに関する授業で比較的導入しやすいと推察される。また、パフォーマンス課題を取り入れた授業を展開するためには、教授者が臨床現場に精通していることが欠かせない。臨床現場で起こりうる事象をよく理解し、それらを解決するための知識や技能の活用方法を十分に理解していなければ有意義な授業を展開できない。つまり、教授者が机上だけでなく現実をより深く理解し、実践的に様々な事象の課題解決に取り組み、専門職としての感性を養い続けることが肝心である。

最後に本稿の執筆にあたり、星槎大学大学院教育学研究科の仲久徳先生から多大なご助言とご指導を賜りました。ここに深謝の意を表します。

【文献】

- 1) 文部科学省中央教育審議会：個人の能力と可能性を開花させ全員参加による課題解決社会を実現するための教育の多様化と質保証の在り方について(答申)．4-6, 平成28年5月30日．
- 2) 西岡加名恵：提案1「逆向き設計」論に基づくパフォーマンス評価の進め方：言語活動の評価への応用可能性を探る(国語科授業づくりと言語活動のあり方—言語活動をどのように評価するか—, 春期学会 第128回兵庫大会)．国語科教育78(0), 5-7, 2015．
- 3) 文部科学省初等中等教育局教育課程課：育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/houkoku/1346321.htm, (閲覧日：2018年4月1日)．
- 4) 文部科学省中央教育審議会：幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申), 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室, 平成28年12月21日, 23-26．
- 5) 石川倫子：看護学教育におけるパフォーマンス評価, 看護教育, 55, 8, 692-697, 2014．
- 6) 久保田賢一：構成主義が投げかける新しい教育, コンピュータ&エデュケーション 15, 12-18, 2003．
- 7) 武藤明日香：話す能力を高める国語科の授業の開発：パフォーマンス課題を活用した逆向き設計の授業づくりから, 教師教育研究, 12, 179-189, 2016．
- 8) 宮田佳緒里, 奥村好美：学習課題と評価課題の機能を併せ持つパフォーマンス課題を組み込んだ単元設計とその効果—中学校社会科「日本の諸地域」の学習を題材として—, 兵庫教育大学研究紀要：人間発達教育専攻 特別支援教育専攻 教育内容・方法開発専攻 教育実践高度化専攻 附属学校園 51, 109-117, 2017．
- 9) 荒尾真一, 小池かおり：パフォーマンス課題を利用した授業改善(I)—中学校理科 電流と磁界の単元において試行—, 日本教育心理学会第58回総会(2016), <https://confit.atlas.jp/guide/event/edupsych2016/subject/PA47/crosssearch>, (閲覧日：2018年4月1日)．
- 10) 大方祐輔, 志田正訓, 井上純一(他)：知識基盤社会における理科の役割(2)—パフォーマンス課題を取り入れた授業実践—, 学部・附属学校共同研究紀要(43), 143-152, 2014．
- 11) 田中容子：高等学校におけるパフォーマンス評価の実践, カリキュラム研究 25(0), 91-98, 2016．
- 12) 杉田泰一：地学基礎「地球の形と大きさ」における学びを深める単元構成, 中等教育研究紀要(63), 53-60, 2017．
- 13) 草野純子, 柿原加代子：パフォーマンス評価の考えを導入したフィジカルアセスメント授業取組の検討, 国際情報研究 12(1), 44-55, 2015．
- 14) 宮野公恵, 澤田幸子, 道木恭子：高齢者看護学 応用看護論演習にパフォーマンス課題を導入した試みと成果, 帝京平成大学紀要, 28, 61-70, 2017．
- 15) 矢吹敦：中学校数学科パフォーマンス課題集, www.akita-c.ed.jp/~ckyky/kyoukakenkyu/sansuu/sansuu%20jugyoku%20hint/yabuki/パフォーマンス課題一覧.pdf. (閲覧日：2018年4月1日)．
- 16) 糸賀暢子：学生がやる気になるグループワークを求めて, 看護教育, 56, No.8, 718-726, 2015．
- 17) Gant Wiggins; JayMcTighe, 西岡加名恵(訳)．理解をもたらすカリキュラム設計—「逆向き設計」の理論と方法, 初版, 日本標準, 383-388, 177-204, 2012．
- 18) 文部科学省中央教育審議会：演名委員説明資料, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/attach/1314260.htm, (閲覧日：2018年4月1日)．

- 18) Yager, S. Johnson, D.W. ; Johnson, R.T. Oral discussion, group-to-individual transfer, and achievement in cooperative learning groups. Journal of Educational Psychology, 75, 1, 60-66, 1985.

注1) 評価規準とは学習者に身につけたい能力を具体化したもので目標と同等の意味を持ち、評価基準はどの程度の能力を身につけたかを示す判定尺度をさす。

教育・研究業績

〈2018年1月～2019年3月〉

教育・研究業績＜2018年1月～2019年3月＞

【鈴木啓子】

1. 学術論文

1) 原著

鈴木啓子：頭部位置の違いによる内受容感覚と感情的反応との関連について. 岡山健康科学, 3: 25-30. (査読付) (単著), 2018年9月

頸部アライメントを正常位に保てる者は内受容感覚が鋭敏であり、また、姿勢制御における頸部アライメントの正常化が感情的反応に正の影響を与えることが示唆された。

2. 学会発表

- 1) Hiroko Suzuki, Satoshi Hayashi, Taishi Nakazawa: Connection between Interoception and Emotional Response According to Differences in Head Position. 5th International Meeting of Asia Rehabilitation Science in Taiwan (台湾), 2018.12月

健全な専門学生名を対象に、頭部位置の違いによって内受容感覚の鋭敏性や感情的反応が異なることが示唆された。

- 2) Satoshi Hayashi, Kazuyoshi Kameyama, Hiroko Suzuki, Masaki Sogo, Yuji Watanabe, Ryo Tokuchi, Yasuko Noguchi, Mayu Aisaka, Shinichiro Murakami: Survival times of patients with or without tube feeding in Japanese psychiatric hospitals. 5th International Meeting of Asia Rehabilitation Science in Taiwan (台湾), 2018.12月

精神科病院の入院患者を対象として、経腸栄養を受けた群と受けなかった群とで生命予後を比較した。認知症患者への経腸栄養使用が生存期間を延長することを示唆している。

【十河正樹】

1. 学術論文

1) 原著

渡部悠司, 十河正樹, 野口泰子, 那須宣宏, 横山暁大, 増川武利, 安田従生

: 内部障害を取り扱う学生における教育プログラムの開発-臨床場面を想定した実践力の修得目指して-リハビリテーション教育研究, 25, 2018.3月

作業療法学生が臨床場面で内部障害患者に対する高い実践力を獲得することを目標に逆向き設計を援用した教育プログラムを開発しその有用性について示した。

2) 総説

十河正樹：通所リハの加算のポイントと効率的に算定する工夫，介護の経営と運営，42：p.46-51.
2018.5月

平成30年度の介護報酬改定において、6年ぶりに0.54%のプラス改定であった。一方では、基本報酬の減算を基礎としており、通所リハ本来の専門性の高い高品質なサービスを提供し、「加算」を工夫して安定的に収益を生み出すポイントについて解説。

3) 実践報告

中澤太志，村上唯，十河正樹，林聡：多職種の支援者がかかわることで活動を主体的に取り組み始めた事例，岡山健康科学，3巻，p.43-49. 2018.9月

重度認知症デイケア通所開始するが、不穏、帰宅願望、他者とのトラブルあり、通所困難となっていた事例に、生活行為向上マネジメントを導入し、主体的な作業活動に焦点化し、合意目標を協業することで、活性化された生活に繋げる多職種で関わった事例を報告。

4) 原著

吉岡将太，佐々木早苗，足立崇，平野哲生，足立芳樹，伊藤史人，十河正樹：ALSの新たなコミュニケーション機器の開発研究－サイバニックスイッチ（AI02）とポイントタッチスイッチの使用比較－，岡山健康科学，3巻，p.31-36. 2018.9月

ロボットと生体反応を利用したスイッチ入力インターフェースが開発され、プロトモデルのサイバニックスイッチ（AI02）の有用性を当院療養中のALS患者にポイントタッチスイッチとAI02で比較検討した。結果、日常的に使用している状態と差異なく使用可能であることを示した。

2. 学会発表

(国内学会発表)

- 1) 中澤太志，十河正樹：重度認知症高齢者に作業療法体験と音楽療法を導入した一例. 第28回四国作業療法学会（徳島），2018.1月

重度認知症高齢者に回想を行い、昔の馴染みの作業療法体験を通じた生活の変化と音楽療法を導入したADL活動への取り組みの変化について考察した。

- 2) 十河正樹，榎木潤一，森田郁美，光畑青空，中澤太志，渡部悠司：行動目標が在宅生活継続へ与える影響. 第38回全国デイケア研究大会2018（茨城），2018.7月

老人保健施設において、行動目標を明確化し多職種で共有する体制を整備することで対象者の内面に対して効果的にアプローチできる可能性が示唆された。

- 3) 中澤太志, 村上唯, 渡部悠司, 十河正樹: 他職種の支援者が関わることで活動を主体的に取り組み始めた事例. 第38回全国デイケア研究大会2018 (茨城), 7月
重度認知症デイケアに通う症例に対して生活行為向上マネジメントを活用した事例を報告した。認知症患者に生活行為向上マネジメントを活用することの有用性を明らかにした。
- 4) 渡部悠司, 十河正樹, 中澤太志: 一人暮らし高齢者の在宅生活に対する支援. 第38回全国デイケア研究大会2018 (茨城), 7月
一人暮らし高齢者の困りごとに対してMTDLPを活用した作業療法を実践することで意味のある作業・生活行為における困りごとを解決できる可能性を示した。
- 5) 十河正樹, 榎木潤一, 森田郁美, 光畑青空, 渡辺大喜: 作業の焦点化がネットワークに与える影響. リハビリテーション合同ケア研究大会2018 (米子), 10月
利用者が日常生活で取り組む作業に焦点化し、作業に関わる人との凝集性を踏まえ、ネットワークへ与える影響について報告した。
- 6) 渡辺大喜, 十河正樹: 自立して生活する100歳超の高齢者に対して訪問リハを導入した事例. リハビリテーション合同ケア研究大会2018 (米子), 10月
リハビリテーション特化型デイサービスが閉鎖となり、身体機能低下予防を図るために訪問リハビリテーションを導入し、機能維持・改善を目指した症例について紹介した。
- 7) 十河正樹, 榎木潤一, 森田郁美, 光畑青空, 渡辺大喜: 在宅生活支援によるソーシャルネットワークの広がり. 第29回全国介護老人保健施設大会 (埼玉), 2018.10月
在宅生活の継続を促進する取り組みの中で、ネットワークの広がりが、BI、MMSEへ影響を及ぼす仮説を検証し、報告した。
- 8) 渡辺大喜, 十河正樹: 右被殻出血発症から社会復帰実現に向けて支援した事例～「Demand」を「Real」に～. 第29回全国介護老人保健施設大会 (埼玉), 2018.10月
50歳代前半で右被殻出血を発症し、左片麻痺の後遺症が残存した症例に対して、Demandである社会復帰を目指し支援した症例を紹介した。
- 9) 徳地亮, 東野幸夫, 野口泰子, 林聡, 十河正樹.
Clinical clerkshipによる評価実習で学生が経験した技能の実態調査.
第52回日本作業療法学会, 名古屋 2018.9月
平成28年度にclinical clerkship (CCS) 方式の評価実習を実施した学生の技能単位の経験をCCSチェックリストから分析し、評価実習における技能単位での経験量と経験の傾向を調査した。この研究により、CCS方式の評価実習では機能的評価項目の経験を多く重ねるものの、特に手段的日常生活活動の評価の経験が少ないことを報告した。

- 10) 野口泰子, 東野幸夫, 徳地亮, 十河正樹, 林聡.

課題解決型学習を用いた取り組みが社会人基礎力の育成に及ぼす影響.

第52回日本作業療法学会, 名古屋 2018.9月

本学科で実施している課題解決型学習による「社会人基礎力」への影響を検討し、課題解決型学習の課題解決に向け計画的に現状を分析し課題を見つける行動の経験は、社会人基礎力の「考え抜く力」に最も影響することを報告した。

(国際学会発表)

- 1) Satoshi Hayashi, Kazuyoshi Kameyama, Hiroko Suzuki, Masaki Sogo, Yuji Watanabe, Ryo Tokuchi, Yasuko Noguchi, Mayu Aisaka, Shinichiro Murakami

: Survival times of patients with or without tube feeding in Japanese psychiatric hospitals

5th International Meeting of Asia Rehabilitation Science in Taiwan (台湾), 2018年12月

精神科病院の入院患者を対象として、経腸栄養を受けた群と受けなかった群とで生命予後を比較した。認知症患者への経腸栄養使用が生存期間を延長することを示唆している。

- 2) Satoshi Hayashi, Kazuyoshi Kameyama, Ryo Tokuchi, Yasuko Noguchi, Masaki Sogo, Yuji Watanabe, Taishi Nakazawa, Ryo Tanaka, Shinichiro Murakami

: Psychiatric Occupational Therapy in Japan: Changes and Future Challenges Associated with Mental Health and Welfare Reform

7th International Meeting of Asia Rehabilitation Science in Beijing (北京) 2019年3月

日本における精神障害領域の作業療法士は現在多くが病院に勤務しており現状では、地域生活を中心としたサポート体制は全国的に不十分である。しかし「地域移行支援、訪問・地域生活支援・多職種アウトリーチ」「就労支援・復職支援」「精神科通所リハビリテーション・外来作業療法」等は対象者の生活を安定させ、活動と参加を促進する地域生活支援の一役になり得る。

3. 講演活動

- 1) 岡山県老人保健施設協会 南Bブロック研修会講師, 2018.2月

「中堅スタッフのリーダーシップ・コーチング」をテーマに、看護・介護の中堅職員へ実施。自身の職場でのリーダーシップを振り返ると共に、各職場における人材育成に関する諸問題について回答した。

- 2) 日本作業療法士協会 生活行為向上マネジメント教員および臨床実習指導者向け研修会講師, 2018.8月

生活行為向上マネジメント教員および臨床実習指導者に向けて、学内で生活行為向上マネジメントの概要や理解とその活用方法について、学生指導への先進的取り組みを講義した。

- 3) 第一回SPC（有限会社シルバープランニングセンター）研修会講師，2018.8月
福祉用具販売・レンタル事業者、デイサービス事業者を対象に、現在の制度改定と今後の制度改定を見据えた取り組みについて講義を行った。
- 4) 岡山県作業療法士会 身障部研修会「在宅復帰支援のノウハウを獲得しよう！」、現代社会におけるニーズと他施設の取り組み～生活期リハビリテーションの3つの視点～，2019.2月

4. 著書

- 1) 十河正樹：医療と連携するタイミングを活用し途切れないリハビリを提供する，DAY，219：p.59-62. 2018.2月
医療分野と福祉分野に対象者が移行する際に、途切れないリハビリを提供する際の工夫について解説。病院勤務の療法士に聞き取り調査し、医療側のニーズを合わせて解説。
- 2) 十河正樹：通所リハの運営の工夫第1回サービス移行時のリロケーションダメージを防ぐ工夫，DAY，220：p.110-111. 2018.3月
医療との連携や維持期リハの受け皿として通所リハに求められる役割と運営の工夫について、老人保健施設・通所リハビリテーション・サービス付き高齢者住宅における連携について解説。
- 3) 十河正樹：効果を出す維持・改善のリハビリ 第1回心身機能の維持・改善の工夫，Rehaje，4：p.67-70. 2018.4月
老人保健施設での心身機能の維持・改善の工夫について、リハビリ導入時・スケジュール・個別リハビリ・集団リハビリの運用についてのポイントを解説。
- 4) 十河正樹：効果を出す維持・改善のリハビリ 第2回歩行・移動・動作の維持・改善の工夫，Rehaje，5：p.71-73. 2018.7月
老人保健施設での歩行・移動・動作の維持・改善の工夫について、施設内での動く「動機」に着目したアプローチや在宅復帰に向けた屋外での移動訓練時のリスク管理、また活動量に伴う認知機能に変化について解説。
- 5) 十河正樹：特集1老健通所リハの退所支援・在宅支援の取り組み 在宅復帰が難しい方への対応
③ 医療的ケアが必要な方の在宅復帰支援，DAY，227：p.52-55. 2018.10月
医療的ケアが必要な方が、老人保健施設から退所し在宅復帰する際の重要な以下の3つのポイントについて解説。①看護・介護・主治医による医療的ケアの連携 ②在宅生活を継続するリハビリテーションの継続支援 ③安全な在宅生活継続に関する生活環境整備。

- 6) 十河正樹：効果を出す維持・改善のリハビリ 第3回ADL・IADLの維持・改善の工夫, Rehaje, 6：p.92-95. 2018.10月

老人保健施設でのADL・IADLの維持・改善の工夫について、施設内でのADLの各動作に関わる指導や他職種との連携や取り組み、またIADL動作における屋外移動や実地での訓練の様子などを解説。特に、排泄環境の整備とドアの開閉について解説。

【立山暢一郎】

1. 学会発表

増川武利, 井上茂樹, 立山暢一郎：ヒールウェッジパッド, Rウェッジパッドが歩行に及ぼす影響の検討. 第20回NPOオーソティックスソサエティー総会・学術集会. 大阪, 2018.9月
ヒールウェッジパッド、Rウェッジパッドが扁平足の歩行に及ぼす影響を検討した。

【徳地亮】

1. 学術論文

1) 原著

野口泰子, 徳地亮.

課題解決型学習が作業療法学科学生の社会人基礎力に及ぼす影響.

リハビリテーション教育研究. 25：in press.

本学科で実施している課題解決型学習による「社会人基礎力」への影響を検討した。課題解決型学習の課題解決に向け計画的に現状を分析し課題を見つける行動の経験は、社会人基礎力の「考え抜く力」に影響することが明らかとなり、本学習は社会人基礎力の獲得に効果的で、他職種連携を学ぶ上でも有効な学習法であることが示唆された。

2) 雑文, 他

濱本泰子, 徳地亮.

見学実習でのコミュニケーションスキルに関する学生の自己評価と実習指導者による他者評価の比較検討.

リハビリテーション教育研究. 25：in press.

学生の情意領域に対する自己認識と実習指導者の客観視の違いを検討し、学生はソーシャルスキルを肯定的に捉えている割合が高いことが明らかとなった。一方で、学生のコミュニケーションスキルを高める必要があることも示した。

3) 事例報告

安部大昭, 徳地亮, 倉田和範, 山下将輝, 竹田和也.

橈骨骨幹部骨折術後の偽関節の原因と考えられたノンコンプライアンスに対して役割への支援が有効であった一例.

作業療法, 37 (5) : 579-584 2018.

上肢骨折後の治癒過程において禁忌とされていた手の使用を生活動作上やむなく行い、結果として再手術となったことをノンコンプライアンス状態と解釈し、コンプライアンスを高めるための介入を実施した結果、日常生活で使用できる段階まで回復した事例を報告した。

2. 学会発表

(国内学会発表)

1) 濱本泰子, 徳地亮.

見学実習における学生自己評価と他者評価の比較検討.

第31回教育研究大会・教員研修会, 北海道 2018.8月

学生の情意領域に対する自己認識と実習指導者の客観視の違いを検討し、学生はソーシャルスキルを肯定的に捉えている割合が高いことが明らかとなった。一方で、学生のコミュニケーションスキルを高める必要があることを明らかにした。

2) 徳地亮, 東野幸夫, 野口泰子, 林聡, 十河正樹.

Clinical clerkshipによる評価実習で学生が経験した技能の実態調査.

第52回日本作業療法学会, 名古屋 2018.9月

平成28年度にclinical clerkship (CCS) 方式の評価実習を実施した学生の技能単位の経験をCCSチェックリストから分析し、評価実習における技能単位での経験量と経験の傾向を調査した。この研究により、CCS方式の評価実習では機能的評価項目の経験を多く重ねるものの、特に手段的日常生活活動の評価の経験が少ないことを報告した。

3) 野口泰子, 東野幸夫, 徳地亮, 十河正樹, 林聡.

課題解決型学習を用いた取り組みが社会人基礎力の育成に及ぼす影響.

第52回日本作業療法学会, 名古屋 2018.9月

本学科で実施している課題解決型学習による「社会人基礎力」への影響を検討し、課題解決型学習の課題解決に向け計画的に現状を分析し課題を見つける行動の経験は、社会人基礎力の「考え抜く力」に最も影響することを報告した。

4) 竹田和也, 中村光, 徳地亮.

言語性記憶課題における検査語リストの構造化の影響-脳損傷部位による検討-

第42回日本高次脳機能障害学会学術総会, 神戸 2018.12月

脳損傷者を対象に言語性記憶課題の構造化課題と非構造化課題を実施し、前頭葉損傷群は非前頭葉損傷群に比し、構造化課題で学習効果が認められることを示した。

(国際学会発表)

1) Satoshi Hayashi, Kazuyoshi Kameyama, Hiroko Suzuki, Masaki Sogo, Yuji Watanabe, Ryo Tokuchi, Yasuko Noguchi, Mayu Aisaka, Shinichiro Murakami.

Survival times of patients with or without tube feeding in Japanese psychiatric hospitals.

5th International Meeting of Asia Rehabilitation Science in Taiwan, (台湾) 2018.12月

精神科病院の入院患者を対象として、経腸栄養を受けた群と受けなかった群とで生命予後を比較した。認知症患者への経腸栄養使用が生存期間を延長することを示唆している。

2) Satoshi Hayashi, Kazuyoshi Kameyama, Ryo Tokuchi, Yasuko Noguchi, Masaki Sogo, Yuji Watanabe, Taishi Nakazawa, Ryo Tanaka, Shinichiro Murakami.

Psychiatric Occupational Therapy in Japan: Changes and Future Challenges Associated with Mental Health and Welfare Reform.

7th International Meeting of Asia Rehabilitation Science in Beijing, (北京) 2019.3月

日本における精神障害領域の作業療法士は現在多くが病院に勤務しており現状では、地域生活を中心としたサポート体制は全国的に不十分である。しかし「地域移行支援、訪問・地域生活支援・多職種アウトリーチ」「就労支援・復職支援」「精神科通所リハビリテーション・外来作業療法」等は対象者の生活を安定させ、活動と参加を促進する地域生活支援の一役になり得る。

3. 講演活動

1) 高次脳機能障害基礎講座

株式会社ウェルクリエイターズ リハたす職員研修, 倉敷 2018.5

2) 認知症の方をサポートする作業療法士の「生活行為向上マネジメント」

第9回ディメンシアコンgres, 倉敷 2018.5

3) 世界及び日本における認知症の課題, 認知症の障害の本質と認知症原因疾患への理解, 認知症作業療法におけるアセスメントとマネジメント

(一社) 岡山県作業療法士会主催 認知症作業療法アップデート研修 (県北), 鏡野 2018.6

4) 作業療法研究～認定作業療法士を目指す方々へ～

(一社) 日本作業療法士協会 認定作業療法士取得研修共通研修研究法⑤, 東京 2019.1

5) 世界及び日本における認知症の課題, 認知症の障害の本質と認知症原因疾患への理解, 認知症作業療法におけるアセスメントとマネジメント

(一社) 岡山県作業療法士会主催 認知症作業療法アップデート研修 (県南), 岡山 2019.1

6) 地域ケア会議に活かす高齢者やMCIの理解, 具体的なアドバイス

(一社) 岡山県作業療法士会主催 地域ケア会議に関する作業療法士育成研修会, 岡山 2019.2

4. 査読

徳地亮

作業療法おかやま 2018.12

【中澤太志】

1. 学会発表

(国内学会発表)

1) 中澤太志, 村上唯, 渡部悠司, 十河正樹: 他職種の支援者が関わることで活動を主体的に取り組み始めた事例. 第38回全国デイケア研究大会2018 (茨城) 7月

70歳代後半の男性が新規にて重度認知症デイケア通所開始するが、不穏、帰宅願望、他者とのトラブルあり、通所困難となっていた。生活行為向上マネジメントを導入し、キャッチボールを導入した。これにより、できないとあきらめていたキャッチボールが段階的に達成され、生活上での変化もみられた。

2) 渡部悠司, 十河正樹, 中澤太志: 一人暮らし高齢者の在宅生活に対する支援. 第38回全国デイケア研究大会2018 (茨城) 7月

一人暮らし高齢者の困りごとに対してMTDLPを活用した作業療法を実践することで意味のある作業・生活行為における困りごとを解決できる可能性を示した。

(国際学会発表)

1) Hiroko Suzuki, Satoshi Hayashi, Taishi Nakazawa

: Connection between Interoception and Emotional Response According to Differences in Head Position. 5th International Meeting of Asia Rehabilitation Science in Taiwan (台湾), 2018年12月
健全な専門学生名を対象に、頭部位置の違いによって内受容感覚の鋭敏性や感情的反応が異なることが示唆された。

2) Satoshi Hayashi, Kazuyoshi Kameyama, Ryo Tokuchi, Yasuko Noguchi, Masaki Sogo, Yuji Watanabe, Taishi Nakazawa, Ryo Tanaka, Shinichiro Murakami

: Psychiatric Occupational Therapy in Japan: Changes and Future Challenges Associated with Mental Health and Welfare Reform

7th International Meeting of Asia Rehabilitation Science in Beijing (北京) 2019年3月

日本における精神障害領域の作業療法士は現在多くが病院に勤務しており現状では、地域生活を中心としたサポート体制は全国的に不十分である。しかし「地域移行支援、訪問・地域生活支援・多職種アウトリーチ」「就労支援・復職支援」「精神科通所リハビリテーション・外来作業療法」等は対象者の生活を安定させ、活動と参加を促進する地域生活支援の一役になり得る。

【那須宣宏】

1. 学術論文

1) 原著

渡部悠司, 十河正樹, 野口泰子, 那須宣宏, 横山暁大, 増川武利, 安田従生

: 内部障害を取り扱う学生における教育プログラムの開発-臨床場面を想定した実践力の修得を目指して-リハビリテーション教育研究, 25, 2018.3月

作業療法学生が臨床場面で内部障害患者に対する高い実践力を獲得することを目標に逆向き設計を援用した教育プログラムを開発しその有用性について示した。

【野口泰子】

1. 学術論文

1) 原著

野口泰子, 徳地亮, 東野幸夫: 課題解決型学習が作業療法学科学生の社会人基礎力に及ぼす影響. リハビリテーション教育研究, 25, 印刷中.

経済産業省が就業を開始するまでに身に付けておくべき、と提唱する社会人基礎力の学習について、本学科で実施している課題解決型学習を振り返り分析した。中でも「考え抜く力」は課題解決に向け計画的に現状を分析し課題を見つける行動の経験が影響し最も多く分類された。本学習は社会人基礎力の獲得に効果的であり、他職種連携を学ぶ上でも有効な学習法であるといえる。

2) 原著

渡部悠司, 十河正樹, 野口泰子, 那須宣宏, 横山暁大, 増川武利, 安田従生

: 内部障害を取り扱う学生における教育プログラムの開発-臨床場면을想定した実践力の修得目指して-リハビリテーション教育研究, 25, 2018.3月

作業療法学生が臨床場面で内部障害患者に対する高い実践力を獲得することを目標に逆向き設計を援用した教育プログラムを開発しその有用性について示した。

2. 学会発表

(国内学会発表)

- 1) 野口泰子, 徳地亮, 東野幸夫, 十河正樹, 林聡: 課題解決型学習が作業療法学科学生の社会人基礎力に及ぼす影響. 第52回日本作業療法学会. 名古屋, 2018.9月

作業療法士は、対象者や家族・他職種との連携が欠かせないため、学生には基礎学力や専門知識だけではなく、社会人基礎力を育むことが不可欠である。課題解決型学習において、“計画力”や“課題発見力”を多く経験できていることが明らかとなり、課題解決型学習により得た経験が、社会人基礎力の構成要素に影響を与えていることが明らかとなった。

(国際学会発表)

- 1) Satoshi Hayashi, Kazuyoshi Kameyama, Hiroko Suzuki, Masaki Sogo, Yuji Watanabe, Ryo Tokuchi, Yasuko Noguchi, Mayu Aisaka, Shinichiro Murakami

: Survival times of patients with or without tube feeding in Japanese psychiatric hospitals

5th International Meeting of Asia Rehabilitation Science in Taiwan (台湾), 2018年12月

精神科病院の入院患者を対象として、経腸栄養を受けた群と受けなかった群とで生命予後を比較した。認知症患者への経腸栄養使用が生存期間を延長することを示唆している。

- 2) Satoshi Hayashi, Kazuyoshi Kameyama, Ryo Tokuchi, Yasuko Noguchi, Masaki Sogo, Yuji Watanabe, Taishi Nakazawa, Ryo Tanaka, Shinichiro Murakami

: Psychiatric Occupational Therapy in Japan: Changes and Future Challenges Associated with Mental Health and Welfare Reform

7th International Meeting of Asia Rehabilitation Science in Beijing (北京) 2019年3月

日本における精神障害領域の作業療法士は現在多くが病院に勤務しており現状では、地域生活を中心としたサポート体制は全国的に不十分である。しかし「地域移行支援、訪問・地域生活支援・多職種アウトリーチ」「就労支援・復職支援」「精神科通所リハビリテーション・外来作業療法」等は対象者の生活を安定させ、活動と参加を促進する地域生活支援の一役になり得る。

3. 講演活動

- 1) 岡山県学童保育連絡協議会備前県民局協働事業, 放課後児童クラブ指導員向け研修会, 岡山県, 2018.12.11

放課後児童健全育成事業に基づく放課後児童クラブにおいて、備前県民局協働事業では支援を必要とする子どもたちを作業療法士とコンサルテーションを実施している。本講演では発達障害についての知識を指導員に教授し、作業療法士との連携の基盤づくりを目的としている。

- 2) 社会福祉法人ナザレ会聖和保育園, 保育士園内研修, 岡山, 2018.2.19

広汎性発達障害、注意欠如・多動症を中心に、疾患概要や園のなかで想定される行動、保育士に求められる対応などについて、研修を行った。相談件数の多い子どもの「姿勢」については、感覚の視点から学習を深めた。

【濱本泰子】

1. 学術論文

1) 短報

濱本泰子, 徳地亮: 見学実習でのコミュニケーションスキルに関する学生の自己評価と実習指導者による他者評価の比較検討. リハビリテーション教育研究. 25: in press.

学生の情意領域に対する自己認識と実習指導者の客観視の違いを検討し、学生はソーシャルスキルを肯定的に捉えている割合が高いことが明らかとなった。一方で、学生のコミュニケーションスキルを高める必要があることも示した。

【林聡】

1. 学術論文

1) 原著 (欧文)

Hayashi S, Terada S, Oshima E, Sato S, Kurisu K, Takenoshita S, Yokota O, Yamada N.

Verbal or Visual Memory Score and Regional Cerebral Blood Flow in Alzheimer Disease.

Dement Geriatr Cogn Dis Extra. 8 (1): 1-11. 2018 Jan

AD患者における言語性記憶および視覚性記憶の神経基盤と、年齢、性別、教育および全般的な認知障害とを比較した。年齢、性別、教育、MMSEの総得点の影響を除去した後、相関分析は、左帯状回と右楔前部における局所脳血流に言語性記憶得点の有意な相関を示した。同様に、右の楔前部および帯状回における局所脳血流に視覚性記憶得点の有意な相関が認められた。

2) 原著 (欧文)

Sakita M, Murakami S, Fujino H, Hayashi S, Kameyama K, Saito T, Kumagai S.

Remodeling of myelinated fibers and internal capillaries in distal peripheral nerves following aerobic exercise in aged rats.

J Appl Physiol. 125 (4) : 1051-1061. 2018 Oct

老年期における有酸素運動 (AE) が、末梢神経の有髄繊維 (MF) および毛細血管の形態改善に寄与しているかどうかを調べた。さらに、このようなプロセスが、循環血液および末梢神経組織における脳由来神経栄養因子 (BDNF) および血管内皮増殖因子 (VEGF) の相補的活性と関連するかどうかを調べた。結論として、通常の AE が、BDNF および VEGF を含む相補的プロセスを介して、おそらく毛細血管の拡大を誘導し、老化した末梢神経におけるミエリンを増粘することを示している。

3) 総説 (欧文)

Satoshi Hayashi, Kazuyoshi Kameyama

Psychiatric Occupational Therapy in Japan: Changes and Future Challenges Associated with Mental Health and Welfare Reform.

岡山健康科学, 3 巻, p.7-15. 2018年9月

日本における精神障害領域の作業療法士は現在多くが病院に勤務しており現状では、地域生活を中心としたサポート体制は全国的に不十分である。しかし「地域移行支援、訪問・地域生活支援・多職種アウトリーチ」「就労支援・復職支援」「精神科通所リハビリテーション・外来作業療法」等は対象者の生活を安定させ、活動と参加を促進する地域生活支援の一役になり得る。院内の作業療法に偏りがちな作業療法士の配置を分散させ精神医療として可能な地域生活支援をより積極的に展開する必要がある。

2. 学会発表

(国内学会発表)

1) 徳地亮, 東野幸夫, 野口泰子, 林聡, 十河正樹.

Clinical clerkship による評価実習で学生が経験した技能の実態調査.

第52回日本作業療法学会, 名古屋 2018.9.

平成28年度に clinical clerkship (CCS) 方式の評価実習を実施した学生の技能単位の経験を CCS チェックリストから分析し、評価実習における技能単位での経験量と経験の傾向を調査した。この研究により、CCS 方式の評価実習では機能的評価項目の経験を多く重ねるものの、特に手段的日常生活活動の評価の経験が少ないことを報告した。

- 2) 野口泰子, 東野幸夫, 徳地亮, 十河正樹, 林聡.

課題解決型学習を用いた取り組みが社会人基礎力の育成に及ぼす影響.

第52回日本作業療法学会, 名古屋 2018.9.

本学科で実施している課題解決型学習による「社会人基礎力」への影響を検討し、課題解決型学習の課題解決に向け計画的に現状を分析し課題を見つける行動の経験は、社会人基礎力の「考え抜く力」に最も影響することを報告した。

- 3) 林聡, 高山恵子, 平山啓介, 平尾明彦, 近藤啓子, 林英樹, 門田耕一, 浅羽敬之, 石津秀樹, 中田謙二, 藤川顕吾, 三木知子, 横田修, 山田了士, 寺田整司

: 精神科病院の入院患者における経管栄養使用の有無による生存期間の違い.

第37回日本認知症学会学術集会 (札幌), 2018年10月

進行した認知症患者であっても、経管栄養を使用した患者は使用しなかった患者よりも有意に長く生存した。

(国際学会発表)

- 1) Satoshi Hayashi, Kazuyoshi Kameyama, Hiroko Suzuki, Masaki Sogo, Yuji Watanabe, Ryo Tokuchi, Yasuko Noguchi, Mayu Aisaka, Shinichiro Murakami

: Survival times of patients with or without tube feeding in Japanese psychiatric hospitals

5th International Meeting of Asia Rehabilitation Science in Taiwan (台湾), 2018年12月

精神科病院の入院患者を対象として、経腸栄養を受けた群と受けなかった群とで生命予後を比較した。認知症患者への経腸栄養使用が生存期間を延長することを示唆している。

- 2) 亀山一義, 林聡, 赤堀将孝

: 理学療法士と作業療法士の認識の相違からみる作業療法士の役割.

5th International Meeting of Asia Rehabilitation Science in Taiwan (台湾), 2019年12月

協働する機会が多い理学療法士と作業療法士が抱く「作業療法士の役割」の相違を明らかにすることを目的に実施した。理学療法士は作業療法士の役割を「患者の上肢を訓練する」、「ADL、IADLを向上、獲得する」と認識していた。作業療法士は「作業能力を向上させる」、「生活環境への介入」や「退院指導」などを役割として認識していた。抽出されたテキストに共通する項目が多く見られ、対象者の機能や能力の改善を図ることが共通の認識であった。

- 3) Hiroko Suzuki, Satoshi Hayashi, Taishi Nakazawa

: Connection between Interoception and Emotional Response According to Differences in Head Position. 5th International Meeting of Asia Rehabilitation Science in Taiwan (台湾), 2018年12月
健全な専門学生名を対象に、頭部位置の違いによって内受容感覚の鋭敏性や感情的反応が異なることが示唆された。

- 4) Satoshi Hayashi, Kazuyoshi Kameyama, Ryo Tokuchi, Yasuko Noguchi, Masaki Sogo, Yuji Watanabe, Taishi Nakazawa, Ryo Tanaka, Shinichiro Murakami

: Psychiatric Occupational Therapy in Japan: Changes and Future Challenges Associated with Mental Health and Welfare Reform

7th International Meeting of Asia Rehabilitation Science in Beijing (北京) 2019年3月

日本における精神障害領域の作業療法士は現在多くが病院に勤務しており現状では、地域生活を中心としたサポート体制は全国的に不十分である。しかし「地域移行支援、訪問・地域生活支援・多職種アウトリーチ」「就労支援・復職支援」「精神科通所リハビリテーション・外来作業療法」等は対象者の生活を安定させ、活動と参加を促進する地域生活支援の一役になり得る。

3. 受賞

The American Physiological Society APS select 受賞 2018年9月

4. 公的研究費

作業療法教育研究費 助成 (研究分担者)

小林孫兵衛記念医学振興財団研究助成金 (研究分担者)

【増川武利】

1. 学術論文

1) 原著

増川武利, 井上茂樹, 河村顕治: 足部内側縦アーチの違いが歩行周期, 歩行中の足圧中心軌跡に与える影響. 理学療法科学, 33巻2号 p327-330, 2018.4月

足圧分布計測システムを有するトレッドミルを用いて、足部内側縦アーチの高さの違いによる歩行動作の特徴を検討した結果、内側縦アーチの低下した扁平足は歩行中の前方推進力を低下させる要因でないことが示唆された。

2) 原著

渡部悠司, 十河正樹, 野口泰子, 那須宣宏, 横山暁大, 増川武利, 安田従生

: 内部障害を取り扱う学生における教育プログラムの開発-臨床場面を想定した実践力の修得を目指して-リハビリテーション教育研究, 25, 2018.3月

作業療法学生が臨床場面で内部障害患者に対する高い実践力を獲得することを目標に逆向き設計を援用した教育プログラムを開発しその有用性について示した。

2. 学会発表

- 1) 増川武利, 井上茂樹, 立山暢一郎: ヒールウェッジパッド, Rウェッジパッドが歩行に及ぼす影響の検討. 第20回NPOオーソティックソサエティー総会・学術集会. 大阪, 2018.9月

ヒールウェッジパッド, Rウェッジパッドが扁平足の歩行に及ぼす影響を検討した。

【安田従生】

1. 学術論文

1) 原著

渡部悠司, 十河正樹, 野口泰子, 那須宣宏, 横山暁大, 増川武利, 安田従生

: 内部障害を取り扱う学生における教育プログラムの開発-臨床場面を想定した実践力の修得を目指して-リハビリテーション教育研究, 25, 2018.3月

作業療法学生が臨床場面で内部障害患者に対する高い実践力を獲得することを目標に逆向き設計を援用した教育プログラムを開発しその有用性について示した。

【山田英司】

1. 学術論文

1) 原著 (和文)

山田英司, 福田航・他

通常歩行における重症度の低い変形性膝関節症患者の膝関節外反モーメントと下肢関節角度の特徴. 理学療法科学33 (4) : 611-617, 2018.

健常高齢者と grade II の変形性膝関節症患者 (G II 群) を対象として、3次元動作解析装置による歩行分析を施行し、膝関節外反モーメントの比較、骨盤、股関節、膝関節、足関節の矢状面と前額面の関節運動の比較を行った。G II 群では立脚中期に膝関節外反モーメントが大きかった。立脚期中の膝関節可動範囲はG II 群で減少しており、股関節や足関節に影響を及ぼしていた。前額面では、荷重応答期の足関節内反角度に有意差を認めた。重症度の低い変形性膝関節症でもその運動学的特徴は健常高齢者と大きく異なっていることが明らかとなった。

2) 原著 (和文)

山田英司, 福田航・他

内側楔状開大式高位脛骨骨切り術後1年におけるFTAと歩行中の膝関節内反角度との関係. 理学療法科学34 (1) : 27-30, 2019.

本研究の目的は内側楔状開大式高位脛骨骨切り術 (OWHTO) 術後のFTAと歩行中の膝関節内反角度との関係と、膝関節のアライメントの変化が、歩行中の股関節と足関節の前額面の角度に及ぼす影響を明らかにすることである。当院にて、OWHTOが施行された49名を対象とした。術前と術後1年時に歩行分析を行い、FTAと立脚期50%時点の膝関節内反角度との関係を検討した。また、股関節、膝関節、足関節の立脚期50%の時点の値を術前後で比較した。FTAと立脚期50%時点の膝関節内反角度との間には中等度の正の相関関係を示した。歩行中は静的立位と比較すると床反力の大きさや方向が異なるため、FTAと膝関節内反角度との間に高い相関関係が認められなかったと考えられた。

3) 総説

山田英司

変形性膝関節症に対する理学療法戦略～私ならこうする力学的・運動学的視点からのアプローチ～, 四国理学療法士会学会誌 Vol.39 p.39-46, 2018.

4) 総説

山田英司

歩行のみかた・2 変形性膝関節症, 理学療法ジャーナル Vol.51 p.457-462, 2018.

2. 学会発表

(国内学会発表)

1) 池野祐太郎, 山田英司, 福田航, 片岡悠介, 近石宣宏, 五味徳之 (口述)

前十字靭帯再建術後におけるジャンプ着地後の膝関節角度変化と脛骨前方移動量の関連
第52回日本運動器理学療法学術大会 (於千葉) 2019.5月

半腱様筋腱と薄筋腱を用いた解剖学的二重束 ACL 再建術を施行された20名を対象とし、30cm 台からのドロップジャンプを行い、三次元動作解析を行った。健常群の比較と膝関節角度と脛骨前方移動量の関係性を検討した。再建群では膝関節屈曲角度が少なく、膝関節角度と脛骨前方移動量の間
に負の相関を認めた。本研究より、再建術後の膝関節の安定性の重要性が示唆された。

2) 福田航, 横山茂樹, 山田英司, 片岡悠介, 濱野由夏, 池野祐太郎, 近石宣宏, 五味徳之 (口述)

前十字靭帯再建術後の片脚ジャンプ動作における股関節内外転運動とジャンプ距離の関係
第52回日本運動器理学療法学術大会 (於千葉) 2019.5月

半腱様筋腱と薄筋腱を用いた ACL 再建術後 1 年時の患者 19 名を対象とし、前方片脚ジャンプ時の三次元動作解析を行った。踏込時の股関節内転角度とジャンプ距離には負の相関、踏込時の股関節内転角度と股関節外転筋力に負の相関を認めた。本研究より、ACL 再建術後における片脚ジャンプ距離の増加には、踏込時の股関節内転運動が関与しており、股関節内転の減少を図る必要が示唆された。

3) 清水亮介, 山田英司, 近石宣宏, 五味徳之 (口述)

大腿骨顆部骨壊死患者における歩行立脚初期の特性, 第52回日本運動器理学療法学術大会 (於千葉) 2019.5月

変形性膝関節症患者 20 名、内側型大腿骨顆部骨壊死患者 15 名、健常高齢者 7 名をを対象とし、快適歩行の三次元動作解析を行い、立脚初期の歩行の特徴を比較した。変形性膝関節症と内側型大腿骨顆部骨壊死では股関節屈曲角度に差を認めた。また、足関節の可動域は健常群と両群とも異なっていた。本研究より、両群は異なった歩行の特徴を持っていることが明らかとなり、異なった理学療法が必要であることが示唆された。

4) 多田健吾, 山田英司, 近石宜宏, 五味徳之 (口述)

歩行における膝関節可動範囲を用いた変形性膝関節症患者のサブグループ化と関連因子の検討, 第52回日本運動器理学療法学会 (於千葉) 2019.5月

変形性膝関節症患者46名を対象とし、歩行時における膝関節可動範囲を用いて、サブグループ化し、グループ間での因子を検討することとした。快適歩行速度の歩行を三次元動作解析を行い、膝関節角度が変化する3点でサブグループ化を行った。2群に群分け可能であり、年齢、体重、足関節背屈角度に差を認めた。本研究の結果より、歩行によるサブグループ化を詳細に行う必要性が示唆された。

(国際学会発表)

1) Yamada E. (Oral)

Gait after medial opening wedge high tibial osteotomy: frontal plane analysis

3th KOREA-JAPAN knee osteotomy symposium, Busan, Korea, 2018.11月

開大型高位脛骨骨切り術が施行された32名を対象とし、術前と術後6ヶ月での快適歩行の三次元動作解析を行い、前額面の関節角度と関節モーメントの変化を比較した。外部膝関節内反モーメントは有意に減少し、股関節内転角度と膝関節内反角度は有意に減少した。歩行時の膝関節内反角度と外部膝関節内反モーメントとの間に有意な相関関係を認めた。膝関節の外反強制が他関節にも影響を及ぼしていることが明らかとなった。

2) Kawakami S, Yamada E., et al. (poster)

Preoperative factors that affect recovery of knee flexion ROM 6 months after unicompartmental knee arthroplasty

APKASS Congress & the 13th IFOSMA, Tokyo, Japan, 2018.10月

人工関節単顆置換術を施行された24例24膝を対象とし、術前評価として関節可動域、筋力、歩行速度、疼痛、自己効力感、X線評価を、術後6ヶ月時に膝屈曲可動域を調査した。重回帰分析を用いて従属変数を回復率とし、術前パラメータを独立変数として算出した。術後6ヶ月膝屈曲可動域の回復率は99.6%であった。回復率に影響を及ぼす因子として抽出されたのは術前膝屈曲可動域と自己効力感であった。この結果よりUKA後可動域は術前可動域が低下している症例でも回復率は良好であり、自己効力感などを術前理学療法介入で向上することができれば術後可動域の回復率向上の可能性が示唆された。

3. 著書・分担・訳

秋下雅弘, 浅川康吉, 阿部 勉, 新井智之, 栗田主一, 飯島勝也, 池内朋子, 井澤和大, 伊藤直樹, 井上靖吾, 山田英司, 他

高齢者理学療法における管理, 第4章, 5. 術後管理

高齢者理学療法学

医歯薬出版: 東京, 248-253 2018.

山田英司

TKA後の理学療法の現状

人工関節前置換術後の理学療法

山田英司・他 (編集)

文光堂, 東京, 2-5 2019.

4. 査読

山田英司

理学療法ジャーナル

理学療法学

理学療法科学

【横山暁大】

1. 学術論文

1) 原著

渡部悠司, 十河正樹, 野口泰子, 那須宣宏, 横山暁大, 増川武利, 安田従生

: 内部障害を取り扱う学生における教育プログラムの開発-臨床場면을想定した実践力の修得を目指して-リハビリテーション教育研究, 25, 2018.3月

作業療法学生が臨床場面で内部障害患者に対する高い実践力を獲得することを目標に逆向き設計を援用した教育プログラムを開発しその有用性について示した。

2. 講演活動

1) 臨床に役立つバイオメカニクス. 一般社団法人岡山県理学療法士会北支部主催ナイトセミナー, 津山. 2018.9

対象: 岡山県内外理学療法士. 場所: 津山中央病院研修センター

岡山県内の理学療法士を対象にバイオメカニクスの臨床応用と事例を踏まえた内容に関する内容で講演を行った。

【渡辺大喜】

1. 学術論文

- 1) 渡辺大喜, 佐藤三矢, 平上二九三: Trail Making Test を用いた前頭葉賦活による転倒予防効果の検証. 岡山健康科学, 第3巻: 17-23, 2018.9月
施設入所高齢者を対象とし、認知症パターン（脳血管性、アルツハイマー型、前頭側頭型）と転倒回数についての比較を行った。介入方法として Trail Making Test を用いた認知機能トレーニングを3ヶ月間定期的に実施した結果、転倒回数が減少し、転倒予防に繋がる可能性が示唆された。

2. 学会発表

- 1) 十河正樹, 榎木潤一, 森田郁美, 光畑青空, 渡辺大喜: 作業の焦点化がネットワークに与える影響, リハビリテーション合同ケア研究大会2018 (米子), 10月
利用者が日常生活で取り組む作業に焦点化し、作業に関わる人との凝集性を踏まえ、ネットワークへ与える影響について報告した。
- 2) 渡辺大喜, 十河正樹: 自立して生活する100歳超の高齢者に対して訪問リハを導入した事例, リハビリテーション合同ケア研究大会2018 (米子), 10月
リハビリテーション特化型デイサービスが閉鎖となり、身体機能低下予防を図るために訪問リハビリテーションを導入し、機能維持・改善を目指した症例について紹介した。
- 3) 十河正樹, 榎木潤一, 森田郁美, 光畑青空, 渡辺大喜: 在宅生活支援によるソーシャルネットワークの広がり, 第29回全国介護老人保健施設大会 (埼玉), 2018.10月
在宅生活の継続を促進する取り組みの中で、ネットワークの広がりが、BI、MMSEへ影響を及ぼす仮説を検証し、報告した。
- 4) 渡辺大喜, 十河正樹: 右被殻出血発症から社会復帰実現に向けて支援した事例～「Demand」を「Real」に～, 第29回全国介護老人保健施設大会 (埼玉), 2018.10月
50歳代前半で右被殻出血を発症し、左片麻痺の後遺症が残存した症例に対して、Demandである社会復帰を目指し支援した症例を紹介した。

【渡部悠司】

1. 学術論文

1) 原著

渡部悠司, 十河正樹, 野口泰子, 那須宣宏, 横山暁大, 増川武利, 安田従生

: 内部障害を取り扱う学生における教育プログラムの開発-臨床場面を想定した実践力の修得を目指して-リハビリテーション教育研究, 25, 2018.3月

作業療法学生が臨床場面で内部障害患者に対する高い実践力を獲得することを目標に逆向き設計を援用した教育プログラムを開発しその有用性について示した。

2. 学会発表

(国内学会発表)

- 1) 十河正樹, 榎木潤一, 森田郁美, 光畑青空, 中澤太志, 渡部悠司: 行動目標が在宅生活継続へ与える影響. 第38回全国デイケア研究大会2018 (茨城) 7月

老人保健施設において、行動目標を明確化し多職種で共有する体制を整備することで対象者の内面に対して効果的にアプローチできる可能性が示唆された。

- 2) 中澤太志, 村上唯, 渡部悠司, 十河正樹: 他職種の支援者が関わることで活動を主体的に取り組み始めた事例. 第38回全国デイケア研究大会2018 (茨城) 7月

70歳代後半の男性が新規にて重度認知症デイケア通所開始するが、不穩、帰宅願望、他者とのトラブルあり、通所困難となっていた。生活行為向上マネジメントを導入し、キャッチボールを導入した。これにより、できないとあきらめていたキャッチボールが段階的に達成され、生活上での変化もみられた。

- 3) 渡部悠司, 十河正樹, 中澤太志: 一人暮らし高齢者の在宅生活に対する支援. 第38回全国デイケア研究大会2018 (茨城) 7月

一人暮らし高齢者の困りごとに対してMTDLPを活用した作業療法を実践することで意味のある作業・生活行為における困りごとを解決できる可能性を示した。

(国際学会発表)

- 1) Satoshi Hayashi, Kazuyoshi Kameyama, Hiroko Suzuki, Masaki Sogo, Yuji Watanabe, Ryo Tokuchi, Yasuko Noguchi, Mayu Aisaka, Shinichiro Murakami

: Survival times of patients with or without tube feeding in Japanese psychiatric hospitals

5th International Meeting of Asia Rehabilitation Science in Taiwan (台湾), 2018年12月

精神科病院の入院患者を対象として、経腸栄養を受けた群と受けなかった群とで生命予後を比較した。認知症患者への経腸栄養使用が生存期間を延長することを示唆している。

2) Satoshi Hayashi, Kazuyoshi Kameyama, Ryo Tokuchi, Yasuko Noguchi, Masaki Sogo, Yuji Watanabe, Taishi Nakazawa, Ryo Tanaka, Shinichiro Murakami

: Psychiatric Occupational Therapy in Japan: Changes and Future Challenges Associated with Mental Health and Welfare Reform

7th International Meeting of Asia Rehabilitation Science in Beijing (北京) 2019年3月

日本における精神障害領域の作業療法士は現在多くが病院に勤務しており現状では、地域生活を中心としたサポート体制は全国的に不十分である。しかし「地域移行支援、訪問・地域生活支援・多職種アウトリーチ」「就労支援・復職支援」「精神科通所リハビリテーション・外来作業療法」等は対象者の生活を安定させ、活動と参加を促進する地域生活支援の一役になり得る。

「岡山健康科学」投稿規定

2017年9月改訂

- (1) 健康科学に関する臨床および教育に関する研究、総説、実践報告・事例報告などについて、オリジナリティに富んだ原稿を歓迎する。
- (2) 原稿提出締め切りは6月末日とする。(刊行日は9月末日)
- (3) 原稿の種類は、①原著論文、②総説、③資料、④事例報告、⑤短報、⑥その他教育・研究に関するものの5種類とし、未発表のものに限る。
 - ①原著：医療・福祉関連分野あるいは教育分野において、学術的あるいは社会的に価値がありかつオリジナリティのある研究成果を記述した論文。
 - ②総説：医療・福祉関連分野あるいは教育分野における既発表のいくつかの論文をまとめ、さらに新しい解釈や考察を加えた論文。
 - ③資料：総説、原著、事例報告の分類に該当しないが、重要な見解、記録など、紀要編集委員会が適当と認めたもの。(研究・調査報告、紹介など)
 - ④実践報告・事例報告：1例ないし複数例の対象者について、その症状、アプローチ(介入)法、経過などが教訓的な場合(成功例・失敗例)、要点を絞って記述し報告したもの。
 - ⑤短報：研究の速報・略報として簡潔に記載された短い研究論文。
- (4) 研究倫理においては、ヘルシンキ宣言に基づき対象者の保護には十分留意し、説明と同意などの倫理的な配慮に関する記述を必ず行うこと。また、原則として厚生労働省の「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」などの医学研究に関する指針に従うこと。倫理審査を受けて承認されていること。
- (5) 原稿は、原則として横書きとし、ワープロを使用する。A4判用紙1ページ当たり、和文の場合は2段×21文字×40行、欧文の場合はダブル・スペースで2段×44文字×40行とする。文字サイズは11ptとする。図・表は1枚1点とする。
- (6) 原稿分量の上限は、原則として、図表を含め、刷り上がりA4判用紙25ページ以内とする。なお、論文抄録については、3ページ程度とする。
- (7) 論文の構成は、表題、著者名、所属、要旨、本文(はじめに、方法、結果、考察)、文献の順序とする。参考文献等は、原則として論文末又は章末に一括し、著者名全員を列記する。

- (8) 表紙には、表題、希望する論文の種類、3つのキーワードを記載する。著者、共著者の所属の表記は、氏名の右肩および所属の冒頭に¹⁾ ²⁾ というように脚注番号をつけること。
- (9) 各章の表題は1. 2. 3. とし、章中の項目は1)、2)、3) とする。項目以下には(1)、(2)、(3) とする。アラビア数字や外国語の文字は原則として半角とする。
- (10) 紀要に使用するフォントは、原則として和文はMS P明朝（全角：句読点及び記号を含む）、欧文はCentury（半角：句読点及び記号を含む）とする。
- (11) 原則として、図表等は白黒印刷とする。カラー印刷を希望する図表等がある場合は、その旨を併せて註記することとする。図表のタイトルは、図の場合は下、表の場合は上に表記する。
- (12) 参考にした書籍、論文、資料がある場合、パラグラフの末尾に脚注番号を入れ、参考にした書籍、論文、資料の当該部分の出典を参考文献に記載する。脚注番号は半角数字に半角括弧で括る。
- (13) 引用文献は引用順に列記する。文献の省略は公の省略法（Index Medicusなど）に従う。引用文献の著者氏名が4名以上の場合は最初の3名を書き、他は・他、またはet al.とする。
- ①雑誌の場合…著者名：題名. 雑誌名, 巻(号)：頁, 発行年.
- (例) 1) 大嶽昇弘, 林 典雄, 山田みゆき・他：牽引装置の牽引力の再現性について. 理学療法科学, 13 (4)：191-194, 1998.
- 2) Kobetic R, Triolo RJ, Marsolais E, et al.：Muscle selection and walking performance of multichannel FES systems for ambulation in paraplegia. IEEE Trans Rehabil Eng, 5 (1)：23-29, 1997.
- ②単行本の場合…著者名：書名. 出版者, 発行地, 頁, 発行年.
- (例) 1) 千野直一：臨床筋電図・電気診断学入門. 医学書院, 東京, 102-105, 1977.
- 2) Kapandji IA：The physiology of the joint. Churchill Livingstone, New York, 165-180, 1982.
- 3) Shumway-Cook A, Wollacott MH：モーターコントロール 運動制御の理論から臨床実践へ. (訳 田中 繁・他), 医歯薬出版, 東京, 428, 2011.
- 4) Thom M, Sisodiya S, Najm I：Neuropathology of epilepsy. In：Love S, et al. (eds)：Greenfield's Neuropathology, 8th ed, Hodder Arnold, London, 833-887, 2008.
- ③電子文献の場合…著者名：書名. 入手先URL, 閲覧日.
- (例) 1) 厚生労働省：介護給付費実態調査月報（平成19年1月審査分）. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/kyufu/2007/01.html>（閲覧日2007年3月29日）.
- (14) 完成原稿（図表等を含む）は、印刷した正本1部及びコピー3部を提出し、図表等がある場合は、その挿入箇所及び仕上がりサイズを、正本原稿中の適切な箇所に朱書きで指定することとする。ま

た、Microsoft Word形式、一太郎形式又はテキストファイル形式で保存した原稿（表を含む）を入れたCD-R等を併せて提出することとする。ただし、表をMicrosoft Excelで作成している場合は、Excel形式のファイルを併せて提出することとする。図がある場合は、その画像データをtiff、jpeg、png、eps等の一般的な画像形式で保存したものを原稿と同じCD-R等に入れて提出することとする。なお、CD-R等は、後日、執筆者に返却する。

- (15) 原稿の採否は査読結果に基づき紀要編集委員会が決定する。また、紀要頁数等を勘案の上、編集委員会の判断によりリライト、縮小等を求める場合もある。
- (16) 校正の際の訂正加筆は、図表のレイアウト及び植字上の誤りに限るものとし、内容に関する訂正、挿入、削除は認めない。
- (17) 本誌に掲載された論文の著作権は、全て本山学園に帰属する。他の文献から文章・図・表などを転載される場合は、あらかじめ著作権者の了解を得ること。原著者との交渉は投稿者において直接行うこと。また、それらには出所を明記すること。

- (18) 原稿提出先
〒700-0913
岡山県岡山市北区大供3丁目2-18
学校法人本山学園「岡山健康科学」編集委員会
電話：086-233-8020

Okayama Health Science

Editorial board

Satoshi Hayashi (Editor-in-Chief) · Hiroko Suzuki · Nobuhiro Nasu · Masaki Sogo

岡山健康科学 編集委員

林聡 (編集委員長) · 鈴木啓子 · 那須宣宏 · 十河正樹

岡山健康科学 第4巻

平成31年3月31日発行

編集 学校法人 本山学園

岡山医療技術専門学校 研究紀要創刊編集委員会

発行 学校法人 本山学園

岡山医療技術専門学校 研究紀要創刊編集委員会

〒700-0913 岡山県岡山市北区大供3丁目2-18

TEL (086)-233-8020

